

合阿台答兒麻刺。この三つの篋兒乞惕は、前の訶額命額客を赤列都(卷一の也 客赤列都)より奪ひて取られきとて、今その怨を霽しに來つるなりき。彼の篋兒乞惕言ひ合へらく「訶額命の讎を報いんと、今彼の婦人どもを取れり。讎を報いたり我等」と云ひ合ひて、不兒罕嶽より降りて己が家家に回りたり。

帖木眞は、彼の三つの篋兒乞惕實に己が家家に回れりや伏したりやと、別勒古台、孛斡兒出、者勒篋三人を、篋兒乞惕の後より偵ひ、三たび宿り隨はせて、篋兒乞惕に離れさせて、帖木眞は、不兒罕の上より下りて、その胸を

不兒罕嶽に
救はれたる
帖木眞の感
謝

椎ちて言はく「豁阿黑臣額客が、(母と貴びたるなり)馳となりて聽きたる故に、銀鼠となりて見たる故に、本の身を躲れんと、絆せる(足繋ぎて)馬にて、鹿の徑を徑りて、楡の條の家を家作らんと、不兒罕の上を上りき、我、不兒罕の御嶽に、蝨の如き命を匿されたり、我、獨の命を惜まんと、一つの馬にて、罕答孫(獸名)の徑を徑りて、柳の枝の家を家作らんと、御嶽の上を上りき、我、御嶽不兒罕に蟻の如き命を救はれたるぞ、我、甚く恐れさせられたり、我、不兒罕の御嶽を朝ごとに祭れ、日ごとに禱れ。我が子孫の子孫覺え居れ」とて、日を迎へて、帶を項

に掛けて、帽を手(左)に持ち添へて、手(右)に胸を椎ちて、日に「向ひ」九たび跪きて、灌奠(明將馬妳子灑奠)祈禱を捧げたり。

成吉思汗實錄卷の二終り。

王罕の救を
求めに帖木
真等の合喇
屯往き

王罕の返辭

成吉思汗實錄卷の三。

かく陳べて、帖木真、合撒兒、別勒古台三人は、客喇亦惕の
脱幹哩勒(親征)脱憐(元史太祖紀脱里哈)王罕の處に、土兀刺木唵(土兀刺木唵)の合喇屯(林)に居る處に往きて言はく「三つの篋兒乞
惕に、意はず居る處に來て、妻子を虜へて取られたり。
我が罕額赤格(罕父)、妻子を救ひて與へよとて來ぬ、我等」と云へり。その言の返辭に、脱幹哩勒王罕言はく「我去
年汝に言はざりしか。貂鼠の裘を我に持ち來つるに、
父の時に安答と云ひ合ひたるは、父の如くあるぞ」と
て被せられたれば、そこに我言はく「貂鼠不答罕の裘の返禮に、

散りたる汝の部眾を纏め合ひて與へん。黒き貂鼠の裘不塔喇の返禮に、離れたる汝の部眾を集め合ひて與へんとて、合哩兀「腔子の胸扯額只に存れ。腰の尖字可喇に存れ」と云はざりしか。我。今彼の言に従はんと、貂鼠の裘カハコロモの返禮に、都ての篋兒乞惕不魯罕を滅すまで、汝の孛兒帖兀眞合木黑を救ひて與へん。我。黒き貂鼠の裘カハコロモの返禮に、普合木黑き篋兒乞惕阿不喇を打破りて、汝の妃孛兒帖合屯を回らせて伴れ來なん。我等。汝は、札木合迭兀合屯に（札木合年少き故に、）傳言して遣れ。札木合弟は、豁兒豁納黒主不兒豁納黒河原、小河の河原に居るぞ。我は、此處より二萬人にて右の手となり出馬せん。札木合弟は、二萬人となりて左の手とな

札木合の救
を求むる帖
木眞の使

り出馬せよ。我等の約會（會合の場）は、札木合より爲よ」と云へり。

帖木眞、合撒兒、別勒古台三人は、脱斡哩勒罕より回りて家に到りて、帖木眞は、札木合の處に、合撒兒、別勒古台二人を遣り、「札木合安答に言へ（帖木眞と札木合と幼き時安答と）」とて、言ひて遣るには、三つの篋兒乞惕（二物を結び合）に爲されたり。我（妃を奪はれたり。この、の豁）扣子（二物を結び合）一つ（離れざ）ならずや、我等（親友）誰をいかにか復さん。懷（肺腑）を半（親）にせられたり。我（この含は、音ハンに）肝の親族（親）ならずや、我等（この含は、音ハンに）怨をいかにか報いん、我等」と云ひて遣りぬ。札木

札木合の返辭

合安荅に言ひて遣りたる言、かくの如し、又客喇亦惕の
 脱幹哩勒罕の言へる言を札木合に言ひて遣るには、「前
 の日、我が也速該罕額赤格(也速該罕なる父)に助を好く爲された
 るを想ひて、伴とならん、我二萬人となりて右の手と
 なり出馬せん。札木合弟に傳言して遣れ。札木合弟は二
 萬人にて出馬せよ。相合ふ約會は、札木合弟より爲よ」と
 云へり。この言どもを盡させ畢へて、札木合言はく「帖木
 眞安荅を、座空になれりと知りて、我が心痛めり。懷半
 になれりと知りて、我が肝痛めり。讎を復しに、兀都亦
 惕、兀洼思篋兒乞惕を滅して、夫人孛兒帖を救はん。怨を

兀魯格 兀魯格客

哈赤

報いに、普合木黑合阿惕篋兒乞惕を打破りて、妃孛兒帖を回
 らせ救はん。今彼の鞍轡を拍つ時鼓の音となして遽
 て驚く脱黒脱阿は、不兀喇客額兒に居るぞ。(不兀喇原路駝原親征録)不刺
 川内府輿圖に、恰克圖の東に布拉喀倫あり。喀倫の南に布拉河あり、西に流れて
 色楞格河に入る。露西亞の地圖には、ブレン河とあり、不兀喇原はこの布拉河
 の邊の原野蓋ある箭筒を搖閃す時反り走る歹兒兀孫は、
 今幹兒桓薛涼格二河の「閉なる」塔勒渾阿喇勒に居るぞ。
(幹兒桓河は、今の鄂爾坤河にして、唐書回鶻の傳に昆河また噶昆水、元史太宗紀に
 幹兒寒河、明宗紀に幹耳罕水、虞集の句容郡王世績の碑に幹歡河、歐陽玄の僕氏家
 傳に幹爾汗河などあり、薛涼格河は、今の色楞格河にして、唐書回鶻の傳に仙娥河、
 元史巴而朮阿而忒的斤の傳に薛靈哥水、耶律鑄の雙溪醉隱集に錫蘭河、僕氏家傳に
 僕輩傑河、瀚海集に習靈駕河などあり、塔勒渾阿喇勒即蓬に風戦ぐ時黒
 ち勇婦の島は、兩河合流の處にある出島なるべし。蓬に風戦ぐ時黒
 き林を争ふ合阿台荅兒馬刺は、今合刺只客額兒に居る

蓬に風戦ぐ時黒

合刺

札木合が出陣のくらせ約會の地

ぞ。(合刺只原高寶銓の説に、今の哈拉河の下流の東北岸の地ならんと云へり。)今我等は、直に乞勒豁木噠(乞勒豁河、水道提網の啓見活河)を横コぎるに、猪鬃草チヨソウサウは何處にも有れ、筏イカダ組み撒勒忽牙て入らん。彼の遽アワて驚オドロく脱黑脱阿トククアの天窓ソラマドの上より入りて、彼の緊要キンエウなる帳房骨チヤウバウコフを倒クラすべく衝ツきて、彼の妻子フマコを盡ツくるまで虜トラへん。彼の福神フクシの帳房骨チヤウバウコフ (大黒柱と云ふが如き者)を折ツるべく衝ツきて、彼の都スベての部眾ブシウを空ナしくなるまで虜トラへん。

札木合ヂヤムカ又言イはく「帖木眞安荅チヤムジンアンダ、脱幹哩勒罕トクカンリルカン阿合アカ (脱幹哩勒罕なる兄)二人フタリに言イへ」とて言イはく「我ワレには、遠トホく見ミゆる蘇ソを祭マツれり、我ワレ、黒クロき強牛キヤウギウの皮カバにて張ハりたる蓼トウ蓼トウたる音オトある鼓ツを打ツてり、我ワレ、黒クロき快馬ハイキウマに乗ノれり、我ワレ、硬カタき衣裳イシヤウを被カたり、我ワレ、鋼コウを

の鎗ユシを執トれり、我ワレ、挑皮チヤウヒある箭ヤを扣カけたり、我ワレ、合阿惕篋兒カアチキヤ乞惕キチの處トコロに戦ウマひに出馬シユツバせん便オホちと言イへ。長ナガき遠トホく見ミゆる蘇ソを祭マツれり、我ワレ、牛ウシの皮カバにて張ハりたる濁ニジれる聲コエある鼓ツを打ツてり、我ワレ、脊黑セグロの快馬ハイキウマに乗ノれり、我ワレ、革被カバせたる鎧ヨロイを被カたり、我ワレ、柄ツカある環刀ワフンタウを執トれり、我ワレ、扣子コウシある箭ヤを扣カけたり、我ワレ、兀都亦惕ウツドイチ「兀洼思ウヰサ」蔑兒乞惕メチキチの處トコロに死シに合アはん (死戦せん)便オホちと言イへ。脱幹哩勒罕トクカンリルカン兄アニ出馬シユツバするには、不兒罕フエカン嶽ダケの前マヘより帖木眞安荅チヤムジンアンダを過スぎて來キて、幹難河カンナンガハの源ミナモトに孛脱罕ボトクハン孛幹兒ボカンニ只ヂに約會ヤクワイせん。此處ココより出馬シユツバするには、幹難河カンナンガハに沂サカノボり、安荅アンダの部眾ブシウ此處ココに在アり。安荅アンダの部眾ブシウより一萬人イチマンニン、我ワレ、此處ココ

王罕帖木眞
の出陣

より一萬人、二萬人となりて、斡難河を泝り往きて、孛脫罕孛斡兒只に約會の地に會し合はん」と言ひて遣りぬ。
 札木合の此の言を、合撒兒別勒古台二人來て、帖木眞に言ひて、脱斡哩勒罕に傳言を致せり。脱斡哩勒罕は、札木合の此の言を致さるゝと、二萬人にて出馬せり。脱斡哩勒罕出馬するに、不兒罕嶽の前なる客魯噠の不兒吉岸を指して來ぬ」とて、帖木眞は、不兒吉岸に居たるに、「路(脱斡哩勒罕の路)の處にあり」とて、移りて統格黎克(卷一の統格黎克れども、彼は斡難の源に在り、是は客魯噠の源に在りて、同トからず、却て卷二の騰格里小河に同トきに似たり。)泝り起ちて、塔納豁兒歡(塔納小河、内府輿圖の特納河、克魯倫河の上流に流れ入る小河)にて不兒罕嶽の前に下馬

王罕の後れたるを札木合の咎め

して、帖木眞は、そこより軍を起して、脱斡哩勒罕は一萬人、脱斡哩勒罕の弟札合敢不(親征錄元史)札阿紺孛(一萬人、二萬人にて)乞木兒合豁兒歡(乞木兒合小河、豁兒歡は、豁囉罕に同ト)阿亦勒合喇合納に下馬して居るに會ひ下馬せり。
 帖木眞、脱斡哩勒罕、札合敢不三人一つになりて、そこより動きて斡難の源なる孛脫罕孛斡兒只に到りぬれば、札木合は約會の地に三日前に到りてけり。札木合は、この帖木眞、脱斡哩勒罕、札合敢不等の軍どもを見ると、札木合は、二萬の軍を整へて立ちけり。この又帖木眞、脱斡哩勒罕、札合敢不(一萬人、二萬人)も、その軍どもを整へて到り合ひ

て、さて認め合ひて、札木合言はく「風雪になるとも字端安約束字勒札勒には、雨忽刺になるとも忽刺勒聚會忽刺勒には勿後れそと語り合はざりしか。我等忙豁勒には、者（諾する聲にて、我等のハ）は誓したるに異ならんや。者より後れたる者は、班列者見格より出さんと語り合ひき」と云へり。札木合の言につき、脱斡哩勒罕言はく「約會の地に三日後れて立てりとして、罰ふこと咎むることを札木合弟知れ」と云へり。約會の咎めは、かく言ひ合ひて、

三將の篋兒
乞惕打破り

孛脱罕孛斡兒只より動ききて、乞勒豁河ガハに到りて筏組イカダみて渡ると、不兀喇原バラに、脱黑脱阿別乞（別乞は、族長の稱）の天窓ソラマドの

上より緊要なる帳房骨チヤウバウコツを倒すべく衝き入りて、彼の妻ズメ子を盡くるまで虜へたり。彼の福神の帳房骨チヤウバウコツを折るべく衝きて、彼の都スベの部眾部眾を絶ゆるまで虜へたり。脱黑脱阿別乞トアベキに、睡りて居る程ケドに到るべきを、乞勒豁河ガハに居る魚取、貂鼠取、野獸取、散りたる者ども、「敵來ぬ」とて夜通し走り報告を致し去りき。その報告を致さるゝと、脱黑脱阿兀注思篋兒乞惕トアウツスニキチの歹兒兀孫二人合ひて、薛涼格河セレンゲに沿ひシラガ巴兒忽真（今の巴爾古）（精河の邊）に入り、僅にその身を走り遁れけり。

帖木真孛兒
帖の再會

篋兒乞惕の部眾、薛涼格河ガハに沿ひ夜走りて行く時、我

が軍、走りて行く篋兒乞惕を夜又追掛けて虜へ掠め行く時、帖木眞は、走りて来る民に、「孛兒帖、孛兒帖」と喚びて行く時遇ひて、孛兒帖兀眞は、その走る民の中に居りき。帖木眞の聲を聽きて認めて、車より下りると走りて来て、孛兒帖兀眞、豁阿忽臣二女は、帖木眞の轡繩手綱を夜認めて執りけり。月明ありき。見れば、孛兒帖兀眞なるを認めて、抱き合ひに驅寄りたり。其處より帖木眞は、脱幹哩勒罕、札木合安答二人に本夜便ち言ひて遣るに「尋ぬる所用を得たり、我夜は勿夜徹しせそ。此處に下馬せん、我等」と云ひて遣りぬ。篋兒乞惕の部眾走りて來

るを、夜すがら散りて來る間に、その其處に下馬して宿れり。孛兒帖兀眞にかく遇ひ合ひて、篋兒乞惕の民より救ひたる緣故、かくあり。

初先に兀都亦惕篋兒乞惕の脱忽脱阿別乞、兀洼思篋兒乞惕の歹兒兀孫、「合阿惕篋兒乞惕の」合阿台答兒馬刺、この三つの篋兒乞惕三百人は、日の前(さき)脱黑脱阿別乞の弟也客赤列都より也速該巴阿秃兒に訶額命額客を奪ひて取られきとて、それに復し報いんと往きけり。帖木眞を不兒罕嶽を三たび繞らせて、孛兒帖兀眞をそこに獲て、赤列都の弟赤勒格兒孛闊(赤勒格兒カ士)に收容せし

孛兒帖を收めたる赤勒格兒の懺悔

めたりき。かく收容シヨウヨウしたるまゝに住みて、赤勒格兒チルグール字闊コ反り走りて出づる時言はく「黒クロき老鴉ヤマガラスは、殘ノコれる皮カを食ハむ命分イハレある者モノなるに、雁カリ鵝ハクワを食ハまんと望ノゾみたりき。
合老温 脱忽喇温外グワイ貌バウ惡アシき赤勒格兒チルグール我ワレ妃兀真キキウジンに逼セマるとなりて、普アホキき篋兒カシラ
合塔兒乞キ惕トに禍ワザハヒとなれり我ワレ賤男シノノツなる惡アシき赤勒格兒チルグールは、黒クロき頭カシラ
合喇除に「禍ワザハヒ」至ヒトらるべくなれり。獨ヒトリの命イシチを逃ニガれ、暗クラき隘處ハサマに鑽キり
合黑察罕入イらば、障蔽シヤウヘイに誰ナレにか爲ナらるゝことあらん、我ワレ忽刺都クツラドの鳥鳥
合勒合名ナなる惡アシき鳥トリは、鼠ネズミ小コ鼠ネズミを食ハむ命分イハレある者モノなるに、天テン
忽魯罕 忽出堅鷲ガ鵝ハクワを食ハまんと望ノゾみたりき。服裝フクサウ惡アシき赤勒格兒チルグール我ワレ福フク
忽納兒あり幸サキある兀真ウツジンを收ウサめて來キるとなりて、都スベての篋兒カシラ乞キ
忽哩牙

惕トに禍ワザハヒとなれり、我ワレ豁コ乞兒キ能能はす譯譯する惡アシき赤勒格兒チルグールは、涸カれた
渾討兀る頭カシラに「禍ワザハヒ」至ヒトらるべくなれり、我ワレ羊糞塊ヤウフンクワイの如ゴトき命イシチを逃ニガれ、
豁兒孫黒クロく暗クラき隘處ハサマに鑽キり入イらば、羊糞塊ヤウフンクワイの如ゴトき我ワレが命イシチに院イン
合喇亮 合温忽 合卜察勒子シと誰ナレにか爲ナらるゝことあらん、我ワレ院院子子は、明譯明譯に從従へり、院院
牙安云イふと、反カり逃ニげ去サりき。
合阿台 合塔孫合阿台カアタイ蒼兒サウ馬刺マサを獲エたり。率ヒキぬ來キて、板イタの枷カシを帶オばし
合勒敦めて、御嶽イノタテ不フ見罕ムルカンに向ムカはしめたり。別勒古台ベレクグタイの母ハハ、彼カの隣トナリ
合勒敦にあり」と告ツげられて、別勒古台ベレクグタイ、その母ハハを取トりに往ユき
合木黑て、彼カの房ヘヤに、別勒古台ベレクグタイは、右ミダの門カドより入イれば、その母ハハは、
合喇破衣ヤレイ羊皮ヒツシカハの衣コロモにて左ヒダリの門カドより出イでけり。外ソトなる他人アズシビト

合阿台蒼兒
馬刺の房は
別勒古台の
母の逃げ匿
れ

篋兒乞惕の
勦滅

に言へらく「我が子どもは、合惕(罕の復稱)になれりと告げられたり、我。此處に悪き人に配ぎて、今子どもを面をいかで見ん、我」と云ひ、走りて密き林に鑽り入りき。かくて尋ねて得られざりき。別勒古台那顔(別勒古台官人)は、篋兒乞惕の只骨ある人(人と云)に「我が母を伴れ來よ」と云ひては、僕頭箭にて射殺すなりき。不兒罕獄を圍み合ひたる三百の篋兒乞惕を子孫の子孫に至るまで灰を吹拂ふが如く滅せり。残れる彼等の妻子は、抱くべき者どもをば抱けり。門に入らゝめらるべき者どもをば門に入らゝめたり(明)。他的其餘妻子每、可以做妻的、做了妻、做奴婢的。

王罕札木合
に帖木眞の
感謝

做了奴婢

脱幹哩勒罕、札木合二人を帖木眞感謝みて言はく「我が罕額赤格、札木合安荅二人に伴と爲られて、皇天后土に力を添へられて、稜威ある皇天に名のりて、母なる土地に到らゝめて、(天を父とし、地を母とする故に、敵の國土をも母と云へり、到らしむは、到らしめらるの意なるべし)男の怨ある篋兒乞惕の民を、彼等の懐も空にならたり。彼等の肝も半にならたり、我等、彼等の位も空にならたり。親族の人をも失はゝめたり、我等、彼等の残れる者どもをも掠めたるぞ、我等、篋兒乞惕の民をかく壊りて退かん」と云ひ合へり。

敵營に遺れる幼兒曲出

兀都亦惕篋兒乞惕逃ぐる時、貂鼠の帽ある、牝鹿の蹄皮の靴ある、粉皮と水の貂鼠と接ぎたる衣ある、五歳なる、曲出の名ある、その目に火ある幼兒を、我等の軍人どもは、營盤の内に遺りたるを得て、伴れ來て、訶額命額客に給事に率て與へて去れり。

三將の引上げ

帖木眞脱幹哩勒罕、札木合三人一つになりて、篋兒乞惕の奥向の房を推倒して、和合せる婦人を掠めて、幹兒罕(即ち前の幹兒桓河)薛涼格二河の塔勒渾阿喇勒より退くに、帖木眞、札木合二人は、一つとなりて、豁兒豁納黑河原を指して退けり。脱幹哩勒罕退くには、不兒罕嶽の背より訶闊兒

帖木眞札木合幼き時二たびの安苔

秃主兒不を過ぎ、(兒不の二字倒置(せるに似たり))合察兀喇秃速ト赤惕、忽里牙秃速ト赤惕を過ぎ、その野獸を圍獵して、土兀刺の黒林を指し退きたり。
帖木眞、札木合二人は、豁兒豁納忽河原に會ひ下馬して、曩の安苔と爲り合へるを想ひ合ひて、安苔を爲直合ひて親み合はんと云ひ合へり。最前に安苔と爲り合へるには、帖木眞十一歳なる時、札木合は麤(麤の骨に作れる)髀石を帖木眞に與へて、帖木眞の銅灌(銅灌の如き)の髀石と換へ合ひて、安苔に爲り合ひて、安苔と云ひ合ひたるは、幹難の氷の上に髀石を打つ時、其處に安苔と云ひ合ひた

りき。(阮葵生の蒙古吉林土風記に曰く「羅丹鹿蹄腕骨也。舊俗、以蹄腕骨、隨手擲擲爲戲、視其偃仰、橫側爲勝負、小者以鹿、大者以鹿、瑩澤如玉、兒童婦女圍坐、擲擲以相樂、以薄圓擊之、則曰「怕格」又有較遠之戲、趨冰上、以中爲勝、名曰「撒罕」云へり。撒罕は骨なる蒙語、撒合の轉なり。帖木真、札木合の氷の上にて、卵石を打てるは、いはゆる較) 其の後の春、木作の弓にて、箭を射合ひて居る時、札木合は、二歳牛の二つの角を粘けて、孔あけて聲ある響、鑿頭(鑿、鳴)を帖木真に與へて、帖木真の柏の頭ある鏑矢と換へ合ひて、安荅に爲り合へり。二たび安荅と云ひ合ひたる緣故、かくあり。

曩に老人たちの言を聞きて「安荅の人は、命一つにて棄て合はず、命の護となるなり」とて、親み合へる緣故、かくあり。今又安荅を爲直して親まんと云ひ合ひて、

三たび安荅の盟

帖木真は、篋兒乞惕の脫黑脫阿を掠めて取れる黄金の帶を札木合、安荅に繋げさせたり。脫黑脫阿の久しく交尾せざる鬘黒き馬に、札木合、安荅を乗らせたり。札木合は、兀洼思、篋兒乞惕の歹兒兀孫を掠めて取れる黄金の帶を帖木真、安荅に繋げさせたり。又歹兒兀孫の角ある子羊の如き白馬に、帖木真を乗らせたり。豁兒豁納、黒河原の忽勒荅合兒の崖の前に繋れる木の下(忽圖刺合罕の處)に安荅と云ひ合ひて、親み合ひて、筵會し歡び樂み合ひて、夜は衾一つに臥し合ひたりき。

疑はしき札木合の言ひ出し

帖木真、札木合二人親み合ふこと一年、次の年の半ま

で親シカシみ合アひて、その住スめる營盤イヘキより一日ヒトヒ起タたんと云イひ合アひて起タてるは、夏ナラの首ハジメの月ツキの第ダイ十六ジウの赤アカく照テる日ヒに起タちたり。帖木真テムグ、札木合ジャムカ二人共トモに車クルマの前マヘに歩アユみて來キつるに、札木合ジャムカ言イはく「帖木真テムグ安荅アンダ、安荅アンダ山ヤマに挨ヨり下馬ゲせん。我等ワレラの馬飼ウマカヒどもは、帳房チヤウバウに有アリ附ツかん。湖タニに挨ヨり下馬ゲせん。我等ワレラの羊飼ヒツシカヒどもは、喉ノド（喉を養ウケふ食物シヨクモノ）に有アリ附ツかん（明アキラ咱每ワレラ如今イマ挨ヨり山下ヤマノ、放馬ハナツヒツジテ的得シ帳房住テ、挨ヨり湖下タニノ、放羊ハナツヒツジテ的放ハナツヒツジテ羔兒カスガ的喉嚨裏得ノドノ喫クフ的）と云イへり。帖木真テムグは、札木合ジャムカのこの言コトを覺サトりかねて、默モクし立ちて後オクれて起タつ間、車クルマどもを待マちて起タたんとし、帖木真テムグは、訶額命額客ホエルンエケに「札木合ジャムカ

字兒帖兀眞の穎悟

安荅アンダは言イへり。「山ヤマに挨ヨり下馬ゲせん。我等ワレラの馬飼ウマカヒどもは、帳房チヤウバウにありつかん。湖タニに挨ヨり下馬ゲせん。我等ワレラの羊飼ヒツシカヒどもは、羔兒カスガどもは、喉ノドにありつかん」と言イへり。我ワレは、彼カレのこの言コトを覺サトりかねて、彼カレへの答コタヘを何ナニとも言イはざりき。我ワレ母ハハに問トはんとて來キぬ、我ワレと云イへり。訶額命額客ホエルンエケの聲コエせざるに、字兒帖兀眞ジエリテウジン言イはく「札木合ジャムカ安荅アンダは、厭アき易ヤスくと云イはるゝなりき。今イマ我等ワレラを厭アく時トキとなれり。只タ今の札木合ジャムカ安荅アンダの語カタれる語コトは、我ワレ等を便スナハち圖ハカらんとする言コトならん。我ワレ等は勿ナ下馬ゲせそ。この動ウツきたるに依ヨり爽スワヤかに離ハナれ、夜通ヨトホし掛けて動ウツかん便スナハち」と云イへり。

別速惕の家
に遣れる閼
闐出

從ひ來ぬる
諸部の眾

孛兒帖兀眞の言にて、善くとして下馬せず、夜通し
動きて來つる間に、途に泰赤兀惕を過ぎたり。泰赤兀惕
も驚きて、本夜便ち指し向きて札木合の處に動きたり。
泰赤兀惕の「伴なる」別速惕氏の營盤に一人のチヒサ小コ闐闐
出と云ふ子を營盤に遣したるを、我が眾取りて來て、
訶額命額客に與へたり。「それを」訶額命額客養へり。

その夜夜通しして、日明くれば見れば、札刺亦兒（親征
錄元史
札刺兒部元史また押刺伊而部）の合赤溫脱忽喇溫、合喇孩脱忽
喇溫、合喇勒歹脱忽喇溫、この三人の脱忽喇溫兄弟、夜通し
合ひて來たりき。又塔兒忽惕の（所出詳か）合荅安荅勒都

兒罕、兄弟五人の塔兒忽惕も來たりき。又蒙格秃乞顏の
子翁古兒等も、徹失兀惕（所出詳か）巴牙兀惕（卷一なる馬阿里黑伯牙
十二種の中の伯要歹氏、元史の伯岳吾氏又伯牙吾氏）と共に來たりき。巴嚕刺思より忽必
來（親征錄
元史）虎必來、忽都思、兄弟ども來ぬ。忙忽惕より哲台、多
豁勒忽徹兒必（徹兒必は、官名なり。後に任せられたる官の名）兄弟二人
來ぬ。孛兒帖兀眞の弟幹歌連徹兒必（元史食
貨志の幹闊烈闐里必）も、
阿嚕刺惕（元史博爾
朮の傳）阿兒刺氏より離れて、その兄孛兒帖兀眞
に合ひに來ぬ。者勒箴の弟（蒙語迭兀單稱の弟にて、察兀兒罕
のみに係り、速別額台には係らず）察兀
兒罕、速別額台、巴阿秃兒（親征
錄）速不台拔都（元史速不台
また雪不台）は、兀浪
罕（元史兀良合、
又兀良罕氏）より離れて、者勒箴に合ひに來ぬ。別速惕よ

り迭該窟出古兒兄弟二人も來ぬ。速勒都思(元史遜都思氏)より赤勒古台塔乞泰赤兀歹兄弟どもも來ぬ。札刺赤兒の薛扯朶抹黑も阿兒孩合撒兒巴刺なる二人の子と來ぬ。晃豁壇より雪亦客禿徹兒必も來ぬ。速客虔の者該晃答豁勒の子速客該者溫も來ぬ。捏兀歹察合安兀注も來ぬ。
(捏古思氏の察合安兀注捏古思氏は赤那思氏とも云ふ喇失惕額丁に依れば察刺孩領忽の二子堅都赤那烏魯克真赤那の裔なり) 幹勒忽訥兀惕の輕吉牙歹豁囉刺思(卷一なる豁哩刺思の複稱親征錄元史) 火魯刺思より薛赤兀兒朶兒邊より抹赤別都溫も來ぬ。亦乞喇思(親征錄) 亦乞刺思(元史) 亦乞列思(親征錄) の不圖(元史) 孛徒(元史本傳) 孛禿も、こゝに塔となりに行くに依り來ぬ。(不圖は帖木眞の妹帖木命の夫となり) 那牙勤より

裕兒赤兀孫
の符命の宣揚

種索も來ぬ。幹囉納兒(元史幹刺納兒幹耳納幹魯納台氏) より只兒豁安も來ぬ。巴嚕刺思より速忽薛禪も合喇察兒なる子と來ぬ。(この合馬の名高き帖木兒駙馬の五世の祖なり) 又巴阿嚕の豁兒赤兀孫額不堅(裕兒赤兀孫翁)、闊闊搆思もあまたの巴阿嚕と一團來ぬ。
 豁兒赤來て言はく「孛端察兒孛黑多(孛端察兒賢人)の拏へて取れる婦人より生れたる我等の祖は、札木合の祖と腹一つの胞漿一つの者なりき、我等札木合より離れざるものなりき、我等神告(神の御告)降りて、我が目に見せたり。慘白き乳牛來て、札木合を繞りて行きて、その家車に觸るゝと、札木合に觸れて、片方の角を折りて、片角とな

望 豁兒赤の欲

りて、「我が角をおこせ」と云ひ云ひ、札木合の處に吼え
 吼え、土を揚げ揚げ立ちたり。角無き慘白き牡牛は、大な
 る帳房の牀を上にに擡ぎけて、駕りて拽ききて、帖木眞の後
 より大車路にに依り吼え吼え來るに、「皇天后土議り合ひ
 て、帖木眞を國の主人と爲れ」と云ひ、國を載せて持ち
 て來たり」と云ひ、神告を目に見せて我に告げたり。帖
 木眞汝國の主人と爲らば、我を「我がかく」告げたる故
 に、いかにか樂まるむる、汝」と云へり。帖木眞言はく「實に
 かく國を知らしめば（管知せしめば）、萬戸の官人と爲さん」と云
 へり。「豁兒赤は」多き理由を告げたる人を我を萬戸の

札木合より
離れ來ぬる
諸部の眾

官人と爲すとも、何の樂みか有らん。萬戸の官人と爲し
 て、國の美しき好き少女らを自在に取らしめて、三十人
 も婦人あらしめ、又何にても我が語ることを迎へ聽
 け」と云へり。（前段に豁兒赤兀孫を翁と云へるは、後に與へたる尊稱を以て
 追記せるなり。婦人をあまた望みたるを見れば、この時はまだ
 壯かりし
 ならん。）
 忽難を頭とせる格你格思の一團も來ぬ。又荅哩台幹
 惕赤斤の一團も來ぬ。札荅喇より木勒合勒忽も來ぬ。又
 溫眞（親征 錄） 嫩眞部（親征 錄） 撒合夷部（親征 錄）の一團も來ぬ。
 札木合よりかく離れ動きて、乞木兒合小河の阿亦勒合喇
 合納にに下馬して居る時、又札木合より離れて、主兒勤（即ち）

定め合ひて、これより盟して、帖木眞を成吉思合罕(強盛なる大君)と名づけて、罕となりたり。(帖木眞の汗となれるは、蒙古源流に據れば己酉の年にして二十八歳の時なり。己酉の年は、我が後鳥羽天皇文治五年、宋の淳熙十六年、金の大定二十九年、西紀一一八九年なり。)

新庭の政務分任
豁兒赤

成吉思合罕、罕と爲ると、孛斡兒出の弟斡歌來徹兒必(前の斡歌)、箭筒を帶べり。合只温脱忽喇温(前の合赤温)、箭筒を帶べり。哲台、多豁勒忽徹兒必、兄弟二人、箭筒を帶べり。(箭筒を蒙語に豁兒と云ひ、箭筒を帶ぶる者を豁兒。臣又は豁兒赤と云ふ。元史塔察兒の傳に「火兒赤者、佩囊韉侍左右者也」とあるは、)汪古兒(前の翁)、雪亦客禿徹兒必、合答安答勒都兒罕三人言はく、「朝の飲物を勿缺かせそ。夕の飲物を勿慢りそ」とて、巴兀兒臣と爲れり。(巴兀兒臣、また巴兀兒

巴兀兒赤

親烹

豁你赤

飪以奉上飲食者、曰博爾赤(これなり)。迭該言はく、「二歳の羯羊を渴かゝめて、朝に勿缺きそ。寝ぬる時に勿後れそ。花の色(ハナ)の羊を牧して、車底(クルマ)に満さん。黄色(キ)の羊を牧して、圈子(カコヒ)に満さん。貪食(クハヒ)は悪くありき。我、羊を牧して、白腸(ハクシヤウ)を食はん、我」とて、迭該は、羊を牧せり。(羊を豁初と云ひ、管只牙孫)

抹赤即ち木匠

その弟古出古兒(前の窟)言はく、「鎖ある車(クルマ)を、その轄(ナサビ)を勿倒れゝめそ。車軸(クルマ)ある車(クルマ)を、車路(クルマ)の上(ウヘ)に勿壞れゝめそ」と云ひて、「房車(ヘヤクルマ)を治めん」と云へり。多歹(ダイ)扯兒必(前に見え)は、「家の内(ウチ)の婢僕(メシツカヒ)どもを統べん」と云へり。忽必來、赤勒古台、合兒孩脱忽喇温(前の合喇孩)三人に「合

兀勒都赤

等、札木合安苔の處より我をとオモ思ひて伴とならんとて來つる老人どもは、我が福サイハヒある伴とならざらんや」と云へり。己も己も委任オモシせり、汝等ナシラに、(この句、恐らくは脱文あらん)

成吉思汗の即位を聞ける王罕の賀辭

成吉思合罕チンギスカハを罕カンとなしたりとて、客唎ケレ亦惕イトの脱幹トオキ哩リ勒罕レカは、「帖木真テムジンなる我が子を罕カンと爲したるは甚ハナだ善ヨシし。忙豁勒モンゴに君なく、いかにか過スゴさん、汝等ナシラ。此コの協議ケフギを勿ナ壊ヤりそ。協議ケフギを結ムスべるを勿ナ解トきそ。衣コロモの領ネリを勿ナ扯ヒきそ」と云ひて遣りて。(畢りのては、たりの誤りか。然らずば、下に脱字あらん)

成吉思汗實錄卷の三終り。

阿勒壇忽察兒に言はしむる札木合のいやみ

成吉思汗實錄卷の四。

阿兒孩アエカイ合撒兒カフサエ、察兀兒罕チヤウエカ二人を札木合ヂヤムカの處トコロに使ツカヒに遣りたれば、札木合ヂヤムカ言イはく「阿勒壇アアルタン忽察兒チヤル二人に言へ」とて、言ひて遣るには「阿勒壇アアルタン忽察兒チヤル、汝等ナシラ二人は、帖木真テムジン安苔アンダと我ワレと二人の間に、安苔アンダの腰窩ヨシノクビレを戳ナして、肋骨アハラボネを攫ツカみて、何ぞ離れしめたる、汝等ナシラ安苔アンダ我ワレ二人を離れしめず一處トコロに居る時、帖木真テムジン安苔アンダを罕カンに何ぞ爲ナさざりし、汝等ナシラ今何ナニを只心シココロに思オモひてか罕カンとなしたる、汝等ナシラ阿勒壇アアルタン忽察兒チヤル、汝等ナシラ二人は、言へる言コトバに従シタガひ安苔アンダの心ココロを安ヤスからしめて、我が安苔アンダに善ヨシくも伴トモとなりて與ユへよ」と云ひて遣り

盗みしたる
札木合の弟
の殺され

撒阿里的原
のありか

て、

その後札木合の弟台察兒(親征錄元史)、秃台察兒(山)、
 名)の前なる斡列該不刺黑(斡列該の泉親征錄元史)、玉律哥泉(玉律哥泉)に住める
 に、我等の撒阿里客額兒に居る拙赤荅兒馬刺(親征錄)、搠只塔
 兒馬刺(元史)の馬羣を盗みに往きけり。(撒阿里客額兒は、撒阿里的
 里川とあり。薩里河ともあるは、非なり。河にはあらず。廣き谷なり。川なれば、谷の
 義にも用ふ。元史明宗紀に據るに、天曆二年正月和寧の北に即位し、三月、潔堅察罕の
 地に止まり、五月四日、斡耳罕水(斡兒桓河)の東に至り、二十三日、秃忽刺河(土兀刺河)の
 東に至り、六月十五日、撒里怯兒の地に至り、二十一日、闊朶傑阿刺倫に至り、それより
 南に進みて上都に向へり。撒里怯兒は、即ち撒阿里客額兒なり。闊朶傑阿刺倫は、此書
 の末に見ゆる闊迭額阿喇勒にして、客魯噠河の中洲なり。西より進みて、闊迭額島
 より前に撒阿里原に至れるを見れば、撒阿里原は、客魯噠河の上流の地なるべし。
 金幼孜の北征錄に、雙泉海、即撒里怯兒。元太祖發跡之所、舊建宮殿、山川環繞、有
 二海子、西北有三關口、通飲馬河、土拉河とあり、その宮殿は、即ち太祖紀に薩里川
 哈老徒の行宮とある處なれば、二海子の一つは、必ず哈老徒の海子、今の鳴老台の池

荅蘭巴勤主
場の戦

台察兒は、拙赤荅兒馬刺の馬羣を盗みて率て去り
 きた。拙赤荅兒馬刺は、馬羣を盗みて去られて、從者どもに
 心臆せられて、拙赤荅兒馬刺のみ追ひて往きて、夜その
 馬羣の邊に到りて、己が馬の鬣の上に腹にて伏して
 到りて、台察兒の脊梁を折るべく射て殺すと、馬羣を率
 ぬて來ぬ。

「弟台察兒を殺されたり」として、札木合が頭となれる札
 荅蘭は、十三部伴なひて、三萬人となりて、阿刺兀兀惕(明譯文は)
 兀惕、土兒合兀惕(二山の名、親征錄)、阿刺烏秃刺烏(二山)に依り越え
 て、成吉思合罕の處へ出馬して來ぬとて、亦乞喇思よ

り木勒客脫塔黑(親征錄)慕哥(元史字)磨里秃秃(親征錄)孛囉勒歹(親征錄)波欒歹(字秃)二人、成吉思合罕に古咧勒古(字)に居る處に報告を送り來ぬ。この報告を知ると、成吉思合罕は、十三團ありき(團は蒙語古哩延、その複稱古哩額揚なり。親征錄に十三翼と譯したるは支那風に書きたるなり。)一亦三萬人となりて、札木合の迎へに出馬して、荅闌巴勒主惕(親征錄)荅闌版朱思之野(對戰)に立ち合ひて、成吉思合罕は、札木合にそこに動かされ(敗ら)て、幹難の哲咧捏合ト赤孩(哲咧處)に遁れたり。札木合言はく「幹難の哲咧捏に遁れりめたり、我等」と云ひて回る時、赤那思の子ら(一家の子)を七十の鍋(ナベ)に煮て、捏兀歹察合安兀洼の頭を斬りて、馬の尾

七十鍋の狼の羹

に拖きて去りき(赤那思氏は、喇失惕額丁に依れば、察刺孩領忽の二子堅都赤那、烏魯克真赤那の裔なり。堅都赤那は、牡狼、烏魯克真赤那は、牝狼の義にして、赤那思は、狼なる赤那の複稱なり。親征錄の撰者は、修正秘史を譯するに當り、赤那思の姓氏なることを知らず、半途爲七十二竈烹狼爲食と譯せり。)

國來の祝

そこに札木合を其處より回らすると、兀嚕兀惕(元史)兀魯兀台氏(元史)の主兒扯歹(本傳)朮赤台(畏蒼兒の傳)朮徹帶(朮徹帶)は、兀嚕兀惕(親征錄)兀魯吾部(畏蒼兒の傳)を率ぬ、忙忽惕(畏蒼兒)忙兀氏(親征錄)の忽余勒(親征錄)忽因蒼兒(朮赤台の傳)畏蒼兒(本傳)は、忙忽惕(親征錄)忙兀部(親征錄)を率ぬ、札木合より離れて、成吉思合罕の處(トコロ)に來ぬ。晃豁壇(トコロ)の蒙力克額赤格(蒙力克なる父)は、そこに札木合の處(トコロ)に居りて、蒙力克額赤格、その七人の子と、札木合より離れて、そこに成

吉思合罕に合ひに來ぬ。札木合より此等の民來ぬとて、
 成吉思合罕は、己が處に國來ぬと喜びて、成吉思合罕
 は、訶額命兀眞、合撒兒、主兒勤の撒察別乞、泰出らと共に、
 「斡難の林の裏に筵會せん」と云ひ合ひて筵會したる
 に、成吉思合罕に、訶額命兀眞に、合撒兒に、撒察別乞にな
 ど首として一つの甕（馬乳酒を入る、革の甕）を傾けけり。又撒察別乞
 の少き母（莎兒合秃主兒乞の妾撒察別乞の生母）額別該（親征錄元史）薛徹別吉次母野別
 該を首として一つの甕を傾けたる故に、豁哩眞合屯、
 忽兀兒臣合屯（莎兒合秃主兒乞の二妃親征錄元史）忽兒眞火里眞二哈敦二女は
 「我を首とせず、額別該を首として何ぞ傾けたる」と云

主兒勤の二妃の怒

不哩に肩斫らる、別勒古台

ひ、厨官失乞兀兒（親征錄元史）主膳者失丘兒を打ちけり。打たれ
 て厨官失乞兀兒言はく「也速該巴阿都兒、捏坤太石二人死
 にたる故に、かく我が打たれたるはいかに」と云ひて、大
 聲にて哭きけり。

その筵席を我等よりは別勒古台整治し、成吉思合罕
 の駟馬を執りて立ち居りき。主兒勤よりは不哩孛闊（親征錄元史）播里その筵席を整治し居りき。我等の聚馬處より
（蒙語）乞魯額思（親征錄元史）乞列思（錄は禁外繫馬所と注し、史は野外牧場と注せり）合塔斤の人韁
 皮を盗みたるに、盗人を拏へき。不哩孛闊その人を回
 護ひて、別勒古台は常の如く搏ち合ふに、右の袖を脱ぎ

て赤膚にて行きたりき。かく脱ぎたるその赤膚の肩を、不哩孛闊、環刀にて劈くべく斫り(斫り)けり。別勒古台かく斫られたれども、何ともなさず争はず、血を流して行くを、成吉思合罕、木蔭に居て、筵席の内より見て、出でて来て言はく「何ぞかく爲されたりし、我等」と云へるに、別勒古台言はく「傷は未なりき。我が故に兄弟に中惡く爲り合はんや。我、差支へず。我、稍好くあり。兄弟に纒に慣れ合ひ居る時、兄やめよ。暫く立ちとまれ」と云へり。

成吉思汗の
棒打

成吉思合罕は、別勒古台かく勸むれども肯かず、木の枝を折るべく引き(引き)て、皮桶の撞乳棒を抽きだして

完顏襄の塔
塔兒征伐

執りて、打ち合ひて、主兒勤に勝ちて、豁哩眞合屯、忽兀兒臣合屯二女を奪ひて取れり。却て彼等に「睦び合はん」と云はれて、豁哩眞合屯、忽兀兒臣合屯二女を還して、睦び合はんとして使ひ合ひて居る時に、乞塔惕の民の阿勒壇罕(金の章)は、塔塔兒の篋古眞薛兀勒圖(親征錄)、篋兀眞笑里徒(元史)等に、その命に従はれず、王京丞相(王京は、金の國姓なる完顏の丞相完)に「軍を整へて、勿蹶踏ひそ、便ち」と言ひて遣りき。

(金史の紀傳を見るに、この役は、金の章宗承安元年丙辰の歲にあり。我が後鳥羽天皇建久七年、宋の寧宗慶元二年、西紀一一九六年、成吉思汗三十五歳の時なり。)

「王京丞相は、篋古眞薛兀勒圖が頭たる塔塔兒を、兀勒札河(金史内族)、斡里札河(今の烏爾匝河)に浜り、馬羣糧食ごめに追

成吉思汗王
罕の塔塔兒
夾み攻め

捲りて來ぬ」とて、噂を知れり。その噂を知ると、
 成吉思合罕言はく「前の日より塔塔兒の民は、御祖な
 る父を失ひたる讎ある民なりき。今この機會に力合
 はせん(金の軍と夾み攻めん)。我等」と云ひて、脱斡哩勒罕の處に「阿
 勒壇罕の王京丞相は、塔塔兒の篋古眞薛兀勒圖が頭た
 る塔塔兒を兀勒札河に派り追捲りて來ぬと云へり。我
 等の御祖なる父を失ひたる塔塔兒を夾み攻めん、我等
 脱斡哩勒罕額赤格疾く來よ」とて、この傳言を致しに使
 を遣りぬ。この傳言を致さるゝと、脱斡哩勒罕言はく「我
 が子は勺卜(丁度善し、善き機會なり)」と言ひておこせたり。力合はせん、

我等」と云ひて、第三の日に軍士を聚めて、軍を起して、
 脱斡哩勒罕は、速に赴きて、成吉思合罕、脱斡哩勒罕二人
 は、主兒勤の撒察別乞、秦出が頭たる主兒勤(親征録)、月兒斤
 に言ひて遣るに「前の日より我等の御祖なる父を失
 ひたる塔塔兒を今この機會に夾み攻めん。諸共に出馬
 せん」と云ひて遣りぬ。主兒勤に來らるゝことを六日待
 ちて「待ち」かねて、成吉思合罕、脱斡哩勒罕二人、諸共に軍
 を起して、兀勒札に沿ひ、王京丞相と力合はせに來つる
 時、兀勒札の忽速秃失秃延、納喇秃失秃延(親征録、納喇秃失秃延、忽速秃失秃延之野)に
 塔塔兒の篋古眞が頭たる塔塔兒は、そこに寨に據りき。

成吉思合罕、脱斡哩勒罕二人は、かく楯籠れる篋古眞薛兀勒圖をその寨より拏へて、篋古眞薛兀勒圖をそこに殺して、彼の銀の縑車、東珠ある衾を成吉思合罕そこに取りき。

札兀惕忽哩の官王罕の號

篋古眞薛兀勒圖を殺したりとて、成吉思合罕、脱斡哩勒罕二人、(この二人の名は、上の篋古眞の上又は)王京丞相は、篋古眞薛兀勒圖を殺しけりと知ると、甚だ喜びて、成吉思合罕に札兀惕忽哩の名を與へたり。(親征錄 察兀忽魯。札兀惕は、百復稱なり。忽哩は、聚むると云ふ。忽哩牙、聚會と云ふ。忽喇勒などの語根なれ。)客咧亦惕の脱斡哩勒に王の名をそこに與へたり。王罕の名

は、王京丞相の名づけたるに依り、その時より爲れり。王京丞相言はく「篋古眞薛兀勒圖を汝等が力合はせて殺したるは、阿勒壇罕に最大なる助を爲せり、汝等。汝等の此の助を阿勒壇罕に奏し上げん、我、成吉思合罕に此より大きな名を加ふることを、招討の名を與ふることを、阿勒壇罕知しめさん」と云へり。王京丞相は、そこよりかく喜びて退けり。成吉思合罕王罕二人は、そこに塔塔兒を虜へて分け合ひて取り合ひて、家家に回りて下馬せり。

塔塔兒の寨に遣れる幼

塔塔兒の楯籠れる納喇禿失禿延に下りたる營盤の内

兒失乞刊忽都忽

主兒勤の殺掠を聞ける成吉思汗の怒

を掠むる時、一人のチヒサ幼兒を棄てたるを我等の軍士ども營盤より得けり。金の環の鼻環ある、金絲の布に貂鼠にて裏附けたる腹掛あるチヒサ幼兒を伴れ來て、成吉思合罕は、訶額命額客に給事にとて與へたり。訶額命額客言はく「好き人の子なるぞ。家系善き人の胤なるぞ。五人の子には弟、第六にて子となさん。」失乞刊忽都忽と名づけて母育へり。(後の文には失吉忽秃忽とありて、刊の字なし。親征録元史に忽都忽元史太宗紀に胡土虎ともあり。)

成吉思合罕の老營は、哈哩勒秃納兀兒に在りき。(哈哩勒親征録ハレシト。露西亞の地圖に、克魯倫河の南流の東に折る、處より西南に當り、哈里隆湖あり。露國東方經營圖には、哈里隆湖なく、それより東に倚りて、ハラリオル泊あり。哈哩勒秃湖は、この二湖の内なるべし。)老營に残れる者を、主兒勤は、五

十の人の衣服を剝ぎけり。十の人を殺しけり。「主兒勤に然爲されたり」とて、我等の老營に残れる者ども、成吉思合罕に告げたれば、この報告を聽くと、成吉思合罕甚く怒りて言はく「主兒勤にいかでかかく爲されたり、我等、斡難の林に筵會せる時、厨官失乞兀兒をも彼等打ちたり。別勒古台の肩をも彼等斫りたり。睦び合はんと云はれて、豁哩眞合屯、忽兀兒臣二女を還して與へたり、我等、その後曩の讎あり怨ある我等の御祖なる父を失ひたる塔塔兒を夾攻に出馬せん」とて、主兒勤を六日待ちても來られざりき。今又敵に倚り、敵に彼等も爲

撒察泰出の
捕り殺され

れり」と云ひて、成吉思合罕は、主兒勤の處に出馬せり。主
 兒勤を、客魯唵の闊朶額阿喇勒の朶羅安孛勒荅兀惕に居
 る彼等の民を虜へたり。(闊朶額洲は、卷十五に闊迭兀阿喇勒とも闊迭
 額阿喇勒ともあり。朶羅安は七つ、孛勒荅兀惕
 は孤山なる孛勒荅黒の複稱にして七つ岡なり。親征録)朶羅盤陀山。卷十五の末に、朶羅安孛勒荅黒とあ
 り。撒阿里原の東南に當れる客魯唵
 の河中島の小山にして、後に成吉思汗
 の大斡兒朶の設けられたる處なり。撒察別乞、泰出二人は、僅に身
 を遁れたり。彼等の後より襲ひて、帖列格禿阿馬撒兒に
 拏へて、成吉思合罕は、撒察、泰出二人に言へらく「前の日
 我等は何と言ひ合ひしか」と云はれて、撒察、泰出二人

札刺亦兒の
人模合里等
の降附

言はく「言へる言に我等は従はざりき。我等の言に従は
 ずめよ」と云ひて、その言を知らせて、任せ(頸を)て與へ
 たり。彼等の言を知らせられて、彼等の言に従はむべ
 く片付け(殺)て、直に其處に棄てたり。(前日の言とは、成吉思汗を
 立てたる時の盟の言を云
 へる。)

撒察泰出二人を片付くると、回りて來て、主兒勤の民
 を動かす時、札刺亦兒の帖別格禿伯顏(帖別格禿の長者)の子古
 溫兀阿(元史木華黎の傳)孔溫窟哇、赤刺溫孩赤(元史忙哥撒兒の傳)赤老溫愷赤、
 者卜客三人は、その主兒勤の處に居りき。古溫兀阿は、模
 合里(親征録元史)木華黎、不合(蒙韃備録)抹歌なる二人の子伴れにて

主兒勤の家より得たる

見えて言はく「爾の戸口の奴となさん。爾の戸口より逃
不勒廻らば、彼の脚筋を断れ。爾の門の近習の奴となさん。
只爾の門より離れば、彼の肝を割きて棄てよ」と云ひて
額兀額與へたり。赤刺温赫赤魯孩赤も、統格額里格惕合失なる二人の子を成吉
思合罕に見え「め」て言はく「爾の金の戸口を守りて
阿勒壇居よとて奉れり、我、爾の金の戸口より外昂吉答に去らば、彼
阿秃孩の命を絶ちて棄てよ。爾の寛き門を擡昂吉答げて上げよ擡ぐ
阿米（をして）とて奉れり、我、爾の寛き門より外昂吉答に去らば、彼
幹兒堅の心臓を踏みて棄てよ」と云へり。者卜客幹兒堅をば、合撒兒に
幹明與へたり。者卜客は、主兒勤の營盤より額兀額孛囉兀勒親征錄博

幼兒孛囉兀勒

訶額命の養子四人

羅渾元史博爾忽本傳と云へるチヒサ小き幼兒を伴れ來て、訶額命
額兀額額客に見ゆべく與へたり。

訶額命額客は、篋兒乞惕の營盤より得られたる古出三卷
出（の曲）と云ふ幼兒を、泰赤兀惕の内なる別速惕の營盤よ
り得られたる闊闊出と云ふ幼兒を、塔塔兒の營盤より
得られたる失吉刊忽秃忽と云ふ幼兒を、主兒勤の營盤
より得られたる孛囉兀勒と云ふ幼兒を、この四人を家
の内に養ふに、訶額命額客は、「子ども」の爲に、晝は視る
目夜は聽く耳と誰に爲ら「めんか」とて、家の内に養
雪泥へり。莎那思

主兒勤の民の緣由

この主兒勤の民の緣由。主兒勤と爲るには、合不勒罕の七人の子の大兄幹勤巴喇合黑ありき。其の子莎兒合秃主兒乞ありき。主兒勤となるには、合不勒罕の子どもの兄と云ひて、その民の中より擇びて、肝(は)に膽あり、拇指にて善く射る、肺滿つる心ある(胸に肺の)口滿つる(大聲を)剛氣ある、男ごとに技能ある、猛き氣力あるを擇びて、與へて、剛氣あり膽あり勇あり抗ふ者無き(蒙拙兒乞篋思、但有去處皆攻破、無人能敵)が故に、主兒勤と云はれたる緣由かくあり。かゝる勇ある民を成吉思合罕は降服はせて、主兒勤姓ある者を滅せり。彼等の民

別勒古台に殺さる、不哩字可

を部落を、成吉思合罕は、己が昵近の民となしたり。成吉思合罕は、一日不哩字可(前の不哩字可)別勒古台二人に「搏ち合はしめん(相撲取)」と云へり。「先に」不哩字可は、主兒勤の處に居たりき。不哩字可は、別勒古台を片手にて拏へて片足にて撥ねて倒して動かせず壓着けたりき。不哩字可は、國の字可(土)。そこに別勒古台、不哩字可二人を相撲せしめたり。不哩字可は、勝たれざる人なれども、殊更に倒れて與へたり。別勒古台は、壓着けかれ、肩把りて、臀の上を上りて、別勒古台顧みて、成吉思合罕を見れば、合罕は下唇を咬めり。別勒古台悟り得て、彼の上

馬乘りて、彼の二つの領を交へ扼へて、彼の脊梁を膝に据ゑて折りて遣りたり。不哩孛可は、脊梁を折られて言はく「別勒古台に勝たれ」(負)ざるなりき、我合罕を恐れ、伴り倒れ猶豫ひて、命を取らせたり、我」と云ふと死にて去りぬ。別勒古台は、彼の脊梁を扯き折ると、引摺りて除けて去りぬ。合不勒罕の七人の子の兄斡勤巴兒合黑ありき。次に巴兒壇巴阿秃兒ありき。その子也速該巴阿秃兒ありき。(明譯この間に下の句あり)也速該子、卽是太祖。彼(巴兒)の次に忽秃黑圖蒙列兒(卷一の忽秃黑秃蒙古兒)ありき。その子不哩ありき。取り合ひ(争ひ)て、巴兒壇巴阿秃兒の子より隔たり、巴

十一部の札
木合推戴

兒合黑の勇ある子らに伴となれるが爲に、不哩孛可國の孛可、別勒古台に脊梁を折られて死にたり。
 その後雞の年(我が土御門天皇建仁元年辛酉、金の章宗泰和元年、宋の寧宗嘉泰元年、西紀一二〇一年、成吉思汗四十歳の時)
 合塔斤、撒勒只兀惕(親征錄元史) 哈答斤、散只兀(ヒト)一つになりて、合塔斤の巴忽擲囉吉が頭たる合塔斤、撒勒只兀惕の赤兒吉歹巴阿秃兒が頭たる「撒勒只兀惕」は、朶兒邊(親征錄元史) 朶魯班、塔塔兒に睦び合ひて、朶兒邊の合只溫別乞が頭たるもの、塔塔兒の阿勒赤塔塔兒(塔塔兒の分部の名、親征錄元史) 案赤塔塔兒の札隣不合が頭たるもの、亦乞喇思(親征錄元史) 亦乞刺思の土格馬合が頭たるもの、翁吉喇惕(親征錄元史) 弘吉刺の迭兒格克額篋

勒(親征錄)帖木哥阿蠻(明譯は、二人とせり、今親征錄、喇失)、阿勒灰等、豁囉
 刺思(卷一の豁囉刺兒、親征錄元史)火魯刺思(の綽納黑、察合安が頭たるも)
 の、乃蠻(乃蠻の分)より古出兀惕乃蠻(部の名)の不亦嚕黑罕(親征錄)、盃祿
 可汗(元史)不魯欲罕(魯欲は、欲魯の誤りなり)、篋兒乞惕の脫黑脫阿別乞(親征錄)、脫
 別吉(の子忽秃、親征錄)和都(た)火都(た)、幹亦喇惕(親征錄元史)、幹亦刺
 の忽都合別乞(親征錄)、忽都花別吉、泰赤兀惕の塔兒忽台乞哩
 勒秃黑(親征錄)、塔兒忽台希憐秃、豁敦幹兒長(親征錄)、忽敦忽兒章、
 阿兀出巴阿秃兒(親征錄)、阿忽出拔都(喇失惕の集史)、阿忽出巴哈都兒等
 の泰赤兀惕、此等の部落は、阿勒灰不刺黑(阿勒灰の泉、親征錄元史)、阿雷
 泉(に聚ひて、札荅囉の札木合を君に戴かんとて、牝馬

牝馬を腰斬に斬り合ひて盟ひ合ひて、其處より額兒古
 捏木唵(額兒古捏河、水道提綱の額爾古、納河朔方備乘の額爾古訥河)に沿ひ起ちて刊木唵(刊河、親征
 捷河(召烈台抄、兀兒の傳、龍沙紀略の根河、中、俄分界圖の旱河)の額兒古捏に注ぐ出島の
 角(元史)秃律別兒河岸(抄兀兒の傳)、忽蘭也兒吉(赤き崖、即ち赤壁)にて、札木合
 を其處に古兒罕(昔き君、すめらぎ、合木、渾罕に同じ、親征錄)局兒可汗(元史)、局兒罕(汗)に戴
 きたり。古兒罕に戴くと、成吉思合罕王罕二人の處に出
 馬せんと云ひ合へり。出馬せんと云ひ合へるを、豁囉刺
 思の豁囉歹(親征錄)火力台(は、成吉思合罕に古咧勒古に居る
 處に此の報告を致して遣りき。この報告に來らるゝ
 と、成吉思合罕は、王罕にこの報告を致して遣りたれ

ば、王罕は、報告を致さるゝと、軍を起して、急ぎ成吉思合罕の處に王罕到りて來ぬ。

兩軍先鋒の呼び合ひ

王罕に來らるゝと、成吉思合罕王罕二人一つになりて、札木合の迎へに出馬せんと云ひ合ひて、客魯噠河に沿ひ出馬するに、成吉思合罕は、阿勒壇、忽察兒、答哩台三人を先鋒に行かゝめたり。王罕は、桑昆(王罕の子、親征錄、元史、朮赤台の傳、鮮昆)、札合敢木、必勒格別乞三人を先鋒に行かゝめたり。この先鋒より前へ又斥候を遣るに、額捏堅歸列禿(親征錄、捏干貴因都、捏の上類の字を脱し、列は因と誤れり)一坐の斥候を放ちたり。其の彼方徹克徹兒(卷一、卷二の扯、克徹兒、親征錄)徹徹兒山(兒山、また徹)に一坐の斥候を放た

ゝめたり。其の彼方赤忽兒忽(親征錄、赤忽兒黑山)に一坐の斥候を放たゝめたり。我等の先鋒阿勒壇、忽察兒、桑昆等、兀惕乞牙に到りて、下馬せんと云ひ合ひ居る時、赤忽兒忽に放てる斥候より人走りて來て「敵來ぬ」と云ふ報告を送り來ぬ。その報告來ると、下馬せず、敵の迎へに(敵を迎へて)報告を取らん(偵察せん)とて、行きて近づきて、報告を取り(偵察)て、備ありやと探れば、札木合の先鋒は、忙豁勒より阿兀出把阿禿兒、乃蠻の不亦嚕黑罕、篋兒乞惕の脱黑脱阿別乞の子忽禿、斡亦喇惕の忽都合別乞、この四人、札木合の先鋒に行きけり。我等の先鋒は、彼等の處に呼び

風雨の呪

合ひて叫びて、晩になられて、「あす戦はん」と言ひて、退きて大軍に合ひ宿れり。

明日行かゝめて、近づきて闕亦田(親征録元史)闕亦壇(親征録元史)に對陣

して、下りつ上りつ挑み合ひ勢揃合ひて居る時、彼

等、不亦嚕黑罕、忽都合二人、呪(語)札荅(語)を知りて居りき。

呪(語)たるに、風雨(蒙語)札荅(蒙語)呪(語)ひて起し(語)翻りて、彼等の上に風

雨となりき。彼等行く能はずして溝の裏に倒るゝと、

「上帝に愛まれざりき、我等」と言ひ合ひて潰えけり。(札荅の事)

は、輟耕錄卷四に「往往見蒙古人之禱雨者、惟取淨水一盆、浸石子數枚而已。其大者若雞卵、小者不等。然後默持密呪、將石子洶洶玩弄。如此良久、輒有雨、石子名曰鮮荅、乃走獸腹中所產。獨牛馬者最妙。恐亦是牛黃狗寶之屬耳。」金幼孜の北征錄に「永樂八年五月二十八日、發雙清源、午至河、縛筏渡水、得一木板、上有虜字、譯史

諸部の潰走

讀之、乃祈雨之言也。虜語謂之札達。華言云、風雨蓋虜中有此術也。東華錄に載せたる康熙五十六年の勅諭に「書冊所載所謂雷斧雷楔、大約得自深林者皆石、得自平原者皆銅、朕所得最多、將小石一塊、置於泉水攪之、即可祈雨。蒙語謂之查達、齊書冊則曰查達也。」方觀承の松漠草詩の注に「蒙古西域祈雨、以植達石浸水中、呪之、輒驗。植達、生駝羊腹中、圓者如卵、扁者如虎脛。在腎似鸚鵡嘴者、良、色有黃白、駝羊有此、則漸羸瘁、生剖得者尤靈。」などあり。この迷信は古に起りて、今も變はらずに見ゆ。

乃蠻の不亦嚕黑罕は、阿勒台山の前なる兀魯黑塔黑

(親征録)兀魯塔山を指し、離れ動きけり。(阿勒台山は、古の金山、清一統志の阿爾泰山にして、綿互二

千餘里、その最大幹は、烏布薩諾爾の西北に在り、清露兩國の界をなし、科布多城の北に當れり。古出兀惕乃蠻の王庭のありし兀魯黑塔黒の地は、阿勒台山の前、即ち南に在りと云へば、即ち今の)篋兒乞惕の脱黑脱阿の子忽秃は、薛涼格河を指し動きけり。斡亦喇惕の忽都合別乞は、林を爭ひ、失思吉思を指し動きけり。泰赤兀惕の阿兀出巴阿秃兒

成吉思汗の
泰赤兀惕追
撃

は、斡難河を指し動きけり。札木合は、己を君に戴きたる民を虜ふると、額兒古捏河に沿ひ札木合は回り動きけり。彼等をかく潰やして、王罕は、額兒古捏河に沿ひ札木合を追ひたり。(この時、札木合は蓋王罕に降り)成吉思合罕は、斡難河の處に泰赤兀惕の阿兀出巴阿秃兒を追ひたり。阿兀出巴阿秃兒は、その部落の處に到ると、部眾を急がし動かして、阿兀出巴阿秃兒、豁敦斡兒長等の「泰赤兀惕は、斡難河のかなたの邊にあまたの楯(蒙語)秃刺思(明譯方牌)もてる軍士を整へて、戦はんとて整へて立ちけり。成吉思合罕到ると、泰赤兀惕と戦へり。頗る返す返す戦ひて、晩になられて、

成吉思汗の
重傷を者勒
篋の看護

裸盗人

その戦へる地に抗ひ合ひて宿れり。部眾も急ぎて来て又そこに軍士どもと一つに團をなして宿り合へり。成吉思合罕は、その戦ひの中に頸脈を傷けられて、血を止むれども止まらず、悩まさるゝ時、日落ちて、すぐ其處に抗ひ合ひて下馬して、塞がれる血を者勒篋吮ひ吮ひ口を血まみれにして、者勒篋は他の人に頼らず、守り合ひて居て、夜半になるまで塞がれる血を口に満たし、嘔みては吐きて、夜半を過ぐれば、成吉思合罕心醒めて言はく「血乾きて了へり。喉渴けり、我」と云へり。そこより者勒篋は、帽靴上衣下衣都てを脱ぎて、只禪ある赤

裸ハダカにて、抗カガひ合アひて立タてる(陣チンど)敵テキの内ウチに走ハシりて、かなたに團ダンをなせる民タタの車クルマに上ノボりて、馬ウマ乳チを尋タねて得エずして「……敵テキは」急イげる時トキ、騾ロウ馬ウマを乳チ擠シらずに放ハちたるなりき。馬ウマ乳チを得エかねて、一ヒトつの大オホなる蓋フタ桶バケの乳チ酪ラクをその車クルマより取トりて撞ツけて來キぬ。その閒アヒタ往ユくにも來クるにも人ヒトに見イられざりき。上アウツ帝カは只クニ護モり給タマひたるぞ。乳チ酪ラクの蓋フタ桶バケにあるをモち來キて、その者サマ勒レ箠ツ自シら水ミヅを尋タねて持モち來キて、乳チ酪ラクを調アウ合カフして合カ罕ガンに飲ノませたり。三ミたび休ヒみて飲ノみて、合カ罕ガン言イはく「我ワが心ココロ眼マナコ明アるくなれり」と云イひて、欠アヒり起キきて坐スわりつゝ、日ヒ明アけて明アるくなりて見

れば、その坐スわれる周圍マハリは、者サマ勒レ箠ツの吮スひ吮スひ塞フサがれる血チを吐ハきたる周圍マハリは、泥ヒドロ濘シとなれりけり。成ナシ吉ギ思シ合カ罕ガン見ミて言イはく「こは何ナニとなれる。遠トホく吐ハかばいかにありけん」と云イへり。それより者サマ勒レ箠ツ言イはく「爾ナニの惱ナヤまさるゝ時トキ、遠トホく去サらば爾ナニより離ナれんことを怕オソれて、急イぎて嘔クむをば嘔クみて、吐ハくをば吐ハきて、遽アツて我ワが腹ハラにも幾イばくかは入イりぬ」と云イへり。成ナシ吉ギ思シ合カ罕ガン又マタ言イはく「我ワがかくなりて臥フし居イる程ホドに、赤アカ裸ハダカにて何ナニぞ走シりて入イりたる、汝ナシ捕トへられば、我ワをかくあるを告ツげざらんや」と云イへり。者サマ勒レ箠ツ言イはく「我ワが心ココロには、赤アカ裸ハダカにて往ユきて、も捕トへられれば、我

者勸篋の三つの恩

汝等に投ずる心ありき。覺りて捕へて殺さんとして、我が衣服都てを脱ぎて、只禪を脱がざるに、忽ち遁れて、汝等の處にかく馳せて來ぬ、我と言はん「考へ」なりき。我を實となして、衣服を我に與へて世話するならん。我馬に乗りて見つゝ、かゝる閒に來ざることあらんや、我。か思ひて、合罕の渴き惱める心を愈さんとして、眼黒く（太臆）かく思ひて往きけり、我」と云へり。成吉思合罕言はく「今何をか云へる。前の日三つの篋兒乞惕來て、不見罕獄を三たび遠らゝめたる時、我が命を一たび持ちて出でたりき、汝。今又乾きてある血を口にて吮ひて、我が

帖木眞を喚べる合答安

命を開きたり、汝。又渴きて惱み居る時、命を棄てて、敵人の處に眼黒く入りて、飲物足りて我が命を入らゝめ（とり）たり、汝。汝がこの三つの恩を我が心の内に存せん」と勅ありき。

日明け了れば、抗ひ合ひて宿れる軍士ども、夜便ち潰えたりき。團をなしたる民は、逃るゝ能はずとして、團をなしたる地より動かざりき。走れる部眾を止めんとて、成吉思合罕は、宿れる地より出馬して、走る民を止めつつ行く時、峠の上に一人の紅き上衣の婦人、「帖木眞よ」として大聲に喚び、哭きつゝ、立てるを、成吉思合罕自ら聽

きて「いかなる人の妻にてかく喚びたる」と問はせに
 人を遣りぬ。その人往きて問ひたれば、その婦人言は
 く「鎖兒罕失喇の女、我合答安と云ふもの。我が夫をこゝ
 に軍士ども拏へて殺したり。夫を殺さるゝ時、帖木眞を、
 我が夫を救ひ給へとて、叫びて喚びて哭きたり、我」と
 云へり。その人來て、成吉思合罕にこの言を述ぶれば、成
 吉思合罕この言を聽くと、馬を走らして到りて、成吉思
 合罕は、合答安の處に下りて抱き合へり。彼の夫をば我
 等の軍士ども先に殺したりき。かの民を引戻すと、成吉
 思合罕の大軍は、すぐ其處に下馬して宿れり。合答安を

後れて來ぬ
 る鎖兒罕失
 喇

召びて來させて傍に坐ふたり。明くる日鎖兒罕失喇者
 別（親征錄 元史また遮別、折不哲伯、只別、者必、闊別、柘柏など）二人「即ち」泰赤兀惕の脱朶
 格の家人なるその二人も來ぬ。成吉思合罕は、鎖兒罕失
 喇に言へらく「頸の上の重き木を地に去てさせたる、
 衣領の上の枷（古主簿 札兒必牙勒 札亦刺兀勒）の木を免れさせたる。汝等父子どもの
 恩ありしぞ、汝等いかでか後れたる。汝等」と云へり。鎖兒
 罕失喇言はく「我心に見在倚仗に思ひて居りき。いかな
 るぞ急がん、我急ぎて先に來ば、我が泰赤兀惕の官人等、
 我が残れる妻子馬羣糧食を灰の如く廢滅せん、彼等」と
 云ひて急がず、今合罕の處に合はんと追掛けて來ぬ、

戰馬を射たる者別那顔

我等」と云へり。語り了ふれば、善」と云へり。

又成吉思合罕言はく「闊亦田に對陣して挑み合ひ勢揃ひ合ひて居る時、彼の嶺の上より箭來て、我が戰ふ口白き黃馬の鎖子骨を折るべく、誰か射ける、山の上より」と云へり。その言につき者別言はく「山の上より我射けり。今合罕に死なうめられれば、掌の如き地を汗して残らん。恩賜せられれば、合罕の前に、深き水を横ぎり、光る石を碎くべく衝きて與へん。到れと云ふ地に青石を破り、出でよと云ふ地に黒石を裂くべく衝きて與へん」と云へり。成吉思合罕言はく「敵となりたる人は、殺

たることを、敵對したることを、身を隠して、話を諱みて怖るゝなり。この事こそはと云へば、却て殺したることを、敵對したることを諱まず、却て告げたり。伴とすべき人なり。」只兒豁阿歹と云ふ名なりき。「我が戰ふ口白き黃馬を鎖子骨を射たる故に、者別と名づけて、戰はしめん、彼を」とて、者別と名づけて「我が前に行け」と勅ありき。戰ふ口白き黃馬、蒙語に者別列古阿蠻察罕忽刺。者別列古は戰ふ、阿蠻は黃馬なり。者別列古忽刺即ち戰馬を殺したる故に、戰馬に代りて働けとて者別と名を賜ひたるなり。然るを明譯文に「者別、軍器之名也」とあるは、本文の意に非ざる上に、俗文譯の文體に似ず。後人者別、泰赤兀惕より來て伴となれる緣由かくあり。

成吉思汗實錄卷の四終り。

秦赤兀惕の
誅滅

成吉思汗實錄卷の五。

成吉思合罕は、そこに秦赤兀惕を虜へて、秦赤兀惕の

骨ある人を、阿兀出巴阿秃兒、(親征録は、前後に阿忽出拔都と云ひ、こ

史も、前後に阿忽朱巴哈都兒と云ひ、こ、には昂忽兀忽出と云ふ。その實は同じ人なり。元史は阿忽出を省きてたゞ沈忽と書きたれば、阿忽出とは益遠ざかれり。)

豁團幹兒昌(卷四の豁團幹兒長)、忽都兀荅兒(親征録)、忽都荅兒等なる秦赤

兀惕を、子孫の子孫に至るまで、灰の如く刮き拂ひ誅滅

せり。彼の部落の民を動かして来て、成吉思合罕は、

忽巴合牙(親征録)、忽八海牙山(フユゴメリ)に冬籠せり。

你出古惕巴阿囉(眾巴阿囉の中の一部)の失兒古額秃額不堅(失兒古額秃

録元史本紀)、失力哥也不干(伯顔の傳)は、阿刺黑(親征録伯顔の傳)、阿刺、納牙阿

主君を撃へ
たる失兒古
額秃翁

成吉思汗實錄卷の五

塔兒忽台の子弟の追救

失兒古額秃翁の脅迫

(親征 録) 乃牙ナヤなる子どもと、泰赤兀惕タイチウチの官人塔兒忽台タエルクタイ乞哩キリ勒秃黑トルクヘイ林リンに入りて居るを、讎アタある人なりきと云ひて、馬ウマに乗ること能アタはざる(明 譯 體 肥 不 能 騎 馬)塔兒忽台タエルクタイを拏トへて、車クルマに載せて、失兒古額秃翁シエルクエトは、阿刺黑アラクヘイ、納牙阿ナヤアなる子どもと、塔兒忽台タエルクタイ乞哩勒秃黑キリトルクヘイを拏トへて來る時、塔兒忽台タエルクタイ乞哩勒秃黑キリトルクヘイの子ども弟イモどもは、奪ウバひて取らんとて追オヒ驅カけて來ぬ。彼カレの子ども弟イモども追驅オヒカけて來ると、失兒古額秃翁シエルクエトは、起クつこと能アタはざる塔兒忽台タエルクタイを、車クルマの上ウヘに上ノボりてその仰アウむける上ウヘに跨マカり坐ザして、刀カタナを出イダして言イはく「爾ナムチの子弟シヤイらは、爾ナムチを奪ウバひて取りに來ぬ。爾ナムチを我が主君シユクワン

を手に掛カけたりと云ひて、殺コロさずとも、主君シユクワンを手に掛カけたりとて、殺コロさん。殺コロすとも、亦オ只ク殺コロされん、我ワレ。但オシレその死シの中に償ツクひを取り死シなん(明 譯 我 殺 你 也 死 不 殺 你 也 死 不 如 先 殺 了 你 我 然 後 死)と云ひて、跨マカりて大オホなる刀カタナにて彼カレの喉ノドを切キらんとする時、塔兒忽台タエルクタイ乞哩勒秃黑キリトルクヘイ大オホなる聲コエにて弟イモども子どもに叫ヤウびて言イはく「失兒古額秃翁シエルクエトは、我ワレを殺コロさんとす。殺コロ了ラへば、死シにたる命イメなき我ワレが身ミを取りて去サりて何かせん、汝等ナシヤラ。我ワレを殺コロさざるに疾トく回マれ。帖木真テムジンは、我ワレを殺コロさじ。帖木真テムジンを、小チホき時トキに、眼メに火ヒあり、面オモに光ヒカリある「子コ」なりきとて、主アレジなき營盤イヘンの裏ウラに遺オコり

你兀兒 格明

塔兒忽台の子弟のたいもどり

てありとて、取り去りて伴れ來て習はせられたれば、習ふ如くなりとて、新アラき三歳二歳の駒を習はす如く習はし教へ行きたり。死なレしめんと云へども、死なレしむる能はざりき、我ワレ今彼の情に入りてあり。彼の心は開けてありと言はるゝなり。帖木眞は我を死なレしめじ。汝等、我が子ども弟ども、疾く回れ。「然らずば」失兒古額秃は、我を殺して遣らん」と云ひて、大なる聲にて叫べり。彼の子ども弟ども言ひ合へらく「父の命を救はん」とて來ぬ、我等。失兒古額秃彼の命を死なレしめ了へば、空ナき命なき彼の身を何かせん、我等。却て殺さざるに疾く回らん」

納牙阿の明智

と云ひ合ひて回れり。彼等を去らレしめ（彼等去り）たる時、阿刺黑、納牙阿なる失兒古額秃翁の子ども、離れたる者ども來ぬ。其等に來らるゝと、動きて來るに、途に忽秃忽勒訥兀（忽秃忽勒の隅）に到れば、そこに約牙阿言はく「我等この塔兒忽台を拏へて到らば、成吉思合罕は、我等を「正主の君を手に掛けて來ぬ」と云ひ、成吉思合罕は、我等を「正主を手に掛けて來ぬるもの、何ぞ倚信すべき人ならん。此等は、我等の處にいかんぞ伴とならん。伴となる無き人、正主の君を手に掛けたる人をば、斬らレしめん」と云て斬らレめられんか、我等。却て塔兒忽台を此處より放

ちて遣りて、我等、身を以て「成吉思合罕に力を與へに
 來ぬ、我等」と云ひて往かん。「塔兒忽台を拏へて來つ。正
 主の君を廢てかねて、「視るといかにぞ死なうめん」と
 云ひて、放ちて遣りて、「我等、誠實に力を與へん」とて來
 ぬ、我等」と云はん」と云へり。納牙阿のこの言を父も子
 どもも善うと合ひて、塔兒忽台乞哩勒禿黑を忽都忽勒
 の隅より放ちて遣りて、その失兒古額禿翁は、阿刺黑、納
 牙阿なる子どもと來ぬれば、「いかで來て」と云へり。（つては、
の誤りか）失兒古額禿翁は、成吉思合罕に申さく「塔兒忽台乞哩
 勒禿黑を拏へて來つるに、却て「正主の君を視ると、いか

納牙阿等の
 心を成吉思
 汗の褒賞

札合敢不の
 來降

んぞ死なうめん」と云ひて、廢てかねて、放ちて遣りて、成
 吉思合罕に力を與へんとて來ぬ」と云へり。その時、成
 吉思合罕言はく「君を塔兒忽台を手に掛けて來つるな
 らば、正主の君を手に掛けたる人を汝等を、族を擧げ
 て斬らうめらるゝなりき、汝等正主の君を廢てかねた
 る汝等の心善くあり」と云ひ、納牙阿を恩賞せり。
 その後成吉思合罕の處に、客唎亦惕の札合敢不（親征錄
 元史本
 紀 札阿紺孛（朮赤台の傳）は、帖兒速惕（卷六の忽兒班帖
 列速惕 親征錄 塔刺速野）に
 居る處に伴となり來ぬ。彼の來ぬる時、篋兒乞惕戰
 ひに來つれば、成吉思合罕、札合敢不は、便ち戰ひて退け

王罕也速該の安苔の交り

たり。その時土綿秃別干(萬の秃別干部 親征録) 土滿土伯夷部(元史完澤の、傳土伯燕氏) 韓欒董合亦惕(あまたの董合亦惕部 親征録) 董哀部、潰えたる客喇亦惕の民も、成吉思合罕に投じて來にけり。客喇亦惕の王合罕(即ち王罕、親征録) 汪可汗(こそは、先に也速該合罕の時に、中好く平かに住み合へる頃、也速該罕と安苔と云ひ合ひたり) けれ。彼の安苔と云ひ合ひたる緣故は、王罕は、その父忽兒察忽思不亦嚕黑罕の(親征録) 忽兒札胡思盃祿可汗(元史は、可汗の二字を省) 弟どもを殺すの故に、古兒罕(親征録) 菊兒可汗(元史) なる叔父と敵に爲り合ひて、合刺溫合卜察勒(合刺溫の隘 親征録) 合刺溫隘(元史、哈刺溫隘) に鑽り入りて、百人にて出でて、也速該罕の處

客喇亦惕の内亂

王罕の逃げ走り

に來つれば、也速該罕は、彼に己が處に來られて、己が軍にて出馬して、古兒罕を合申(河西の轉親征録) 元史の西夏の地に逐ひて、彼の人民住具を王罕に取りて與へたる故に、安苔と爲り合へること然り。

その後王罕の弟額兒客合喇(親征録) 元史 也力可哈刺(親征録) は、王罕兄に殺さるゝを逃れて去りて、乃蠻の亦難察罕(親征録) 亦難赤可汗(元史、部長亦難赤、喇失惕に依れ) の處に投じけり。亦難察罕は、軍士どもを遣りて、さて王罕は、三つの城(三城は、即ち唐忽惕畏忽惕合兒魯兀惕) に沿ひ去りて、合喇乞苔惕(合喇乞丹の復稱、即ち西遼、親征録) 元史 契丹(元史、丹) 黒契(親征録) の古兒罕(親征録) 菊律可汗(元史、曷思麥里の傳、西遼、闊兒汗、哈刺亦哈赤北魯の傳、西遼主、鞠兒可汗、即ち西遼の葛兒罕)

父の友に對する成吉思汗の厚遇

古魯)の處に往きたりき。(札合敢不等の成吉思汗に)そこより背きて、畏忽惕(委兀兒の複稱唐書の回紇親征錄元史)畏吾兒、唐忽惕(唐書の黨項即ち西夏人)の城を過ぐると、五匹の粘纏を拘へて、乳を擠り合ひて、駱駝の血を刺して飲み、困窮して古薛兀兒納兀兒(古薛兀兒湖親征錄)薛兀兒澤)に來つれば、成吉思合罕は、先に也速該罕と安荅と云ひ合ひたる緣故にて、塔孩巴阿秃兒(卷三の塔孩親征錄)海、速客該者溫(親征錄)雪也孩二人を使に遣りて、客魯噠河の源より成吉思合罕自ら迎へに往きて、飢ゑて瘦せて來ぬ」として、王罕に科斂を斂めて與へて、團營の内に入らゝめて養へり。その冬次第に起ちて、成吉思合罕は、

王罕の部下の怨言

忽巴合牙に冬籠せり。

そこに王罕の弟ども官人ども便ち言ひ合へらく「我等の此の罕阿合(罕兄)は、乏しき性あり、臭き肝を懷きて行くなり。兄弟を殺せり。合喇乞荅惕にも入りたり。又部眾をも苦めたり。今これをいかにか爲ん、我等先の日を云へば、七歳なるを篋兒乞惕の民虜へて去りて、黒き花紋の粘纏の裘を着せて、薛涼格の河邊の不兀喇客額兒にて篋兒乞惕の確を擣きたり。忽兒察忽思不亦嚙黒罕なる彼の父は、却て篋兒乞惕の民を破りて、その子をそこに救ひて來つれば、又塔塔兒の阿澤罕は、十三歳な

るを母ごめに又虜へて去りて、駝駱を牧はらめ行く時、
 阿澤罕の羊飼を率ゐて逃れて來たるぞ。又その後乃
 蠻より怕れて躲れて、撒兒塔兀兒（中亞細亞の抹哈篋惕教徒なる撒兒惕人）の地な
 る垂木唵（垂河唐書の碎葉河西遊記の吹没）に合喇乞荅惕の古兒
 罕の處に往きたるぞ。そこに一年を盡さず、却て背き動
 きて、委兀惕（前の畏忽惕）唐兀惕（前の唐忽惕）の地に沿ひて行くに、
 困窮して、五匹の粘纏を拘へて乳を擠りて、駝駱の血
 を刺して飲みて、一つ盲（片目）の黑鬘の黃馬（蒙語合哩溫抹隣、明旁譯黑鬘尾黃馬）にて、困窮して帖木眞なる子の處に來つれば、
 科斂を斂めて養へるぞ。今帖木眞なる子の處にかく行

王罕を讒れる人人の縛られ

きたるを忘れて、臭き肝を懷きて行くなり。いかにか爲
 ん、我等」と云ひ合へり。かく言ひ合へる言を、阿勒屯阿倭
 黑（親征錄元史）案敦阿述は、王罕に訶きけり。阿勒屯阿倭
 く「我もこの相談に入り合ひたりき。却て己が君を爾
 を捨てかねたり」と云ひて、そこに王罕は、かく言ひ合ひ
 たる額勒忽秃兒（親征錄元史）燕火脫兒、忽勒巴哩（親征錄）渾八力、阿隣
 大石（親征錄）納憐太石（後に阿隣太石）など、弟どもも官人どもを拏へさ
 せけり。弟どもより札合敢不は躲れて、乃蠻に入りけり。
（札合敢不は、王罕の西遼に走れる時、成吉思汗に降りしが、王罕歸りて後、復王罕の處に返り、こゝに至り又逃げたるなり）彼等を繩繫
 け房に入らめて、王罕言はく「我等、委兀惕、唐兀惕の地

より來つる時、何とか云ひ合ひし。汝等の如く何をか
思はん、我は」と云ひて、彼等の面に唾して、彼等の縛を
解かりめたり。罕に只唾せられて、房に居る人都てに
て起ちて唾しけり。

四部の塔塔
兒の征伐

その冬冬籠りて、狗の年（我が建仁二年壬戌、金の泰和二年、宋の嘉泰二年、西紀一二〇二年、成吉思汗四十一歳）の秋、成吉思合罕は、察阿安塔塔兒（親征錄、元史）、察罕塔塔兒（喇失惕、阿勒、親征錄、元史）、阿勒赤塔塔兒（親征錄、元史）、都塔兀惕塔塔兒（喇失惕、塔塔兒、親征錄、元史）、案赤塔塔兒（只塔塔兒、親征錄、元史）、塔兒（喇失惕、秃秃克、魯惕、塔塔兒、親征錄、元史）、阿魯孩塔塔兒（朶遜、別勒奎塔塔兒、額兒忒曼也勒奎塔塔兒）、それらの塔塔兒と蒼蘭捏木兒吉思（親征錄）、蒼蘭捏木兒哥之野（親征錄）に對陣して戦ふ前に、成吉思合罕は、軍法を言ひ合へらく「敵人に勝

蒼蘭捏木兒
吉思の戦

たば、財の處に勿立ちそ。勝ち了へば、その財は、我等の物なるぞ。分ち合ふぞ、我等。敵人に退けられれば、初の衝きだしたる地にて回り戦はん。初の衝きだしたる處にて回らざる人をば斬らうめん」として軍法を定め合へり。蒼蘭捏木兒吉思に戦ひて、塔塔兒を動かせり。勝ちて、兀勒灰失魯格勒只惕にて「彼等を」彼等の國に集めて虜へたり。（兀勒灰河と失魯格勒只惕河と合流する處、親征錄、元史） 兀魯回失連真河（喇失惕、集史） 兀魯回失魯出兒只惕河（水道提綱に據るに、蘆河土名は烏爾虎河、索岳爾濟山より出て西南に流れ、烏朱穆秦左翼の東を経て、西に折れ、色野爾濟河に合ひ、右翼の界に入りて涸る。烏爾虎河は、一統志の圖に吳兒灰河とあり、即ち兀勒灰河なり。色野爾濟は、即ち索岳爾濟にして、山の名も河の名に同じ、この色野爾濟河は、即ち失魯格勒只惕河なり。魯と惕とを失ひ、格は野に轉じて、失野勒只即ち色野爾濟となれり。露西亞の地圖には、烏爾灰を烏拉圭とし、色野爾濟を蘇攸勒奇と

阿勒壇忽察
兒蒼哩台の
軍法違犯

し、二河合流して、昌克圖布里圖湖に入りて止まり、烏珠穆沁右翼の界へは（察罕流れ往かず。成吉思汗の勝ちて進みたる處は、その湖水の北なるべし。） 察罕
塔塔兒（前の察阿）、阿勒赤塔塔兒、都塔兀惕塔塔兒、阿魯孩塔塔
兒、重要なる民をそこに滅して、軍法を言ひ合ひたる言
に、阿勒壇、忽察兒、蒼哩台（親征錄 元史） 族人案彈、火察兒、蒼力台（三人、言に遵はず、財の處に立ちけり。言に遵はざりきと
て、者別、忽必來（親征錄） 虎必來、折別（二人を遣りて、掠めたる馬羣、何にても取りたる都てを取らめたり。
塔塔兒を滅して虜へ了へて、彼等の部落人民を如何

塔塔兒屠戮
の密議

せんとして、成吉思合罕は、大評議を一族にて一の房に
入りて議り合へり。議り合へらく「先の日より塔塔兒の

別勒古台の
密議漏し

民は、御祖なる父を失ひたるなりき。御祖なる父の讎
復して怨報いて、車轄に比べて屠りて殺して與へん（明可將他男子似車轄大的盡誅了。） 絶ゆるまで屠らん。殘
れるを奴婢とせん。各に分け合はん」とて、評議定め合
ひて、房より出づれば、塔塔兒の也客扯唵は、別勒古台に
「いかに評議を議り合へると問ひけり。別勒古台言はく
「汝等を都てを車轄に比べて屠らんと云ひ合へり」と云
ひき。別勒古台のこの言にて、也客扯唵は、塔塔兒の處
に傳説を放ちて寨に據りき。寨に據りたる塔塔兒の處
に我等の軍士ども攻むるとなり、甚だ損失けり。寨に

據れる塔塔兒を辛苦して降して、絶やさんと車轄に比
べて屠る時、塔塔兒言ひ合へらく「人ごとに袖の裏に刀
を袖にして、償ひを取り死なん」と云ひ合ひて、又甚だ
損失しけり。かく塔塔兒を車轄に比べて屠り了へて、そ
こに成吉思合罕勅あり、「我等一族にて大評議を定め合
ひたるを別勒古台の告げたる故に、我等の軍士ども甚
だ損失せり。この後大評議の處に別勒古台勿入り。そ評
議畢ふるまで外にある者を治めよ。治めて鬪殿の事を
盜賊詐譎に係る事を裁斷せよ。評議畢らば、進酒を飲み
たる後に、別勒古台、答阿哩台（前の答哩台、卷一、卷三）二人そこに

也速干合屯
の姉思ひ

入れ」と勅ありき。

そこに塔塔兒の也客扯哩（元史后妃表）の女也速干合屯（元史后妃表）也速
干皇后（元史后妃表）を成吉思合罕はそこに取れり。寵でられたる故
に、也速干合屯言はく「合罕恩賜せば、我を「罕の」人に物
になりて畜ひ給へり。我よりは、姉也遂と云ふもの我
より高く、罕の人に適へるものなるぞ。この頃壻を壻
とりたりき。今は蓋この騷動の裏いづくにか去れら
ん」と云へり。この言につき、成吉思合罕言はく「汝の姉、
汝より善くあるならば、尋ねさせん。姉を來なば避けて
與へんか、汝（明）肯將你位子讓與麼」と云へり。也速干合

屯言はく「可罕恩賜せば、姊を只見ば、姊を避けん」と云へり。この言により、成吉思合罕は、勅を傳へて尋ねさせたれば、妻されたる婿と共に林に入りて行けるに、我等の軍士ども遇ひき。彼の夫は走りき。也遂合屯(元史后也速皇后)をそこに取り來ぬ。也速干合屯は、姊を見ると、先に言へる言に遵ひ、起ちて坐れる位に坐ゑて、その己は下に坐れり。也速干合屯の言に倣ひて、成吉思合罕は、情を入れて、也遂合屯を取りて列位に坐ゑたり。

也遂合屯の婿の殺され

塔塔兒の民を虜へ畢へて、一日成吉思合罕は、外に坐りて酒飲み合ふに、也遂合屯、也速干合屯二女の間に坐

りて酒飲み合ひ居る時、也遂合屯大に歎きたり。そこに成吉思合罕は、心に想ひて(明疑惑了)、孛斡兒出、木合里等官人眾を喚びて來させて言はく「汝等、此の只聚れる人、都てにて部落部落に立て。己より別なる部落の人を別に離れしめよ」と勅ありき。かく部落部落に立ちたれば、一人の年少き善き爽かなる人、部落どもより別に立てり。「汝は何人なるか」と云へば、その人言はく「塔塔兒の也客扯哩の也遂」と云ふ女を與へられたる婿人なりき。我敵に虜へらるゝ時、怕れて逃れて行きて、今鎮れるぞとて來て、あまたの人の中何ぞ認められんと云ひ

て行きけり」と云へり。この言を成吉思合罕に奏したれば、勅あり「只又敵せんと思ひて劫賊となりて行きけり。今何を窺ひにか來し。彼が如き者どもは、車轄に比べたり。何ぞ疑はん。目の背處(目に見えぬ處)に棄てよ」と云へり。尋で斬らめたり。

王罕の篋兒乞惕征伐

その狗の年、成吉思合罕の(のほ原文に「を」をなす宜と誤れり)塔塔兒の民の處に出征したる時、王罕は、篋兒乞惕の民の處に出征して、脫黑脫阿別乞を巴兒忽眞脫窟木(親征錄元史)巴兒忽眞之隘(卷一の闊勒巴兒忽眞脫古木)に逐ひて、脫黑脫阿の太子脫古思別乞(親征錄)土居思別吉を殺して、脫黑脫阿の忽禿黑台察阿噲二女

なる彼の女ども(親征錄)忽都台察勒渾二哈敦(女の名を合屯の名と誤れり)彼の妃どもを取りて、忽圖赤刺溫(親征錄)和都赤刺溫二人なる彼の子どもを民ごめに虜へて、成吉思合罕に何も與へざりき。

成吉思汗王罕の乃蠻征伐

その後成吉思合罕王罕二人、乃蠻の古出古惕(乃蠻の分部の名)兀惕乃蠻の不亦嚕黑罕の處に出征して、兀魯塔塔黑(親征錄)兀魯塔山の鎖豁黑兀孫(鎖豁黒の水親征錄)莎合水(今の科布多河の上流なる索果克河)に居る處に到りて、不亦嚕黑罕は對陣する能はずして、阿勒台山(今の科布多城の西南なる阿爾泰の東南幹山)を越え動きたり。鎖豁黑水より不亦嚕黑罕を襲ひて、阿勒台山を越えさせ、忽木升吉兒

の兀朮古河(劉郁の西使記の龍骨河、西域水道記の烏隆古河)に沿ひ追ひて行く時、也廸
 土卜魯黑(親征錄元史)也的脫字魯(親征錄元史)と云ふ彼等の官人斥候に行き
 て、我等の斥候に追はれて、山の上(ウヘ)に走らんとし、肚帶(ハラ)
 を斷たれて、そこに拏へられき。兀朮古河に沿ひ追ひて、
 乞失勒巴失納兀兒(乞失勒巴失の湖、親征錄元史)黑辛八石之野(西使記の乞則里八寺、水道提綱の奇薩爾巴
 思鄂模西域水道記の噶勒札爾、巴什淖爾また赫色勒巴什淖爾)に馳せ到りて、不亦魯黑罕(親征錄元史)をそこ
 に窮めたり。

王罕の心變り

そこより成吉思合罕王罕二人回りて來る時、乃蠻の
 戦ふ(善く)可克薛兀撒卜喇黑(親征錄元史)曲薛吾撒八刺(親征錄元史)は、巴亦荅
 喇黑別勒赤兒(巴亦荅喇黑的納、即ち落合、親征錄)拜荅刺邊只兒之野(水道提綱、貝
 德勒克河の)

札木合の讒言

庫冷白兒齊爾(蒙古遊牧記、拜達里克河の庫倫伯勒齊爾)軍を整へて戦はん
 この伯勒齊爾は、拜達里克河と查克河との落合なり)とつけり。成吉思合罕王罕二人は、戦はんとて軍を整へ
 て到りて、夕暮(ユラ)になられて、朝(アシタ)に戦はんとて陣列(ゼンレツ)にて
 宿(ヤド)れり。そこに王罕その陣處(ゼンジュ)に火を燒かせて、夜便ち合
 喇薛兀勒河(親征錄)に哈薛兀里河(哈の下刺の字、脱ちたり)沂(ナカ)りて動きけ
 り。
 そこに札木合は(闊亦田の戦に敗れ、額兒古捏河にて王罕に降りてより、王罕の伴となりて居たれば)王罕
 と共に動き合ひて行く時、王罕に札木合言へらく「帖木
 真(ジン)なる我が安荅(アンダ)は、先より乃蠻の處(トコロ)に使聘(シヤウヘイ)ありき。今
 は來(キ)ず。罕(カン)、罕(カン)、居(イ)る白翎雀(ハクレイジヤク)にて我は(ワレ)あるぞ。渡(ワタ)る告天雀(コウテンジヤク)
 阿只刺忽(アジシク)

白翎雀と告
天雀

にて我が安答はあり。乃蠻に往きしぞ。投せんとして
 後れたりと云ひき。(親征 時札木合在幕下日出望見汪
 可汗立旗幟非舊處馳往問之曰「王知悉否我昆弟如
 野鳥依人終必飛去余若白翎鶴也棲息幕上寧肯去
 乎我嘗言之矣」元史 札木合言於汪罕曰「我於君是白翎
 雀他人是鴻雁耳白翎雀寒暑常在北方鴻雁遇寒則
 南飛就暖耳」意謂帝心不可保也 白翎雀 合余魯合納 明譯
 雀兒河渥兒斯の重譯 孩喇合納 鳴と譯し 果勒 孩兒合納 海鳴と譯せり 今
 雪鳥 擲米揚の字書 思屯思奇の字書 元史に従へり 輟
 耕錄卷の二十に「白翎雀生於烏桓朔漠之地 必勒都兀兒 明譯告天雀兒河渥
 雌雄和鳴自得其樂」とあり 告天雀は 蒙語 兒斯の重譯野鴛即
 ち雁類 洪鈞の重譯寒暑異棲之鳥 明の茅元儀の武備志なる韃靼方言に叫天兒を
 賓塔兒と云ふとある 賓塔兒は 即ち必勒都兀兒なり 爾雅の釋鳥に「鵲天鵲」その郭

注に天如鸚雀色似鶉好高飛作聲江東呼為天鵲正字通に鶲俗呼告天鳥其鳴
 如禽形醜善鳴聲高多韻一至順鎮江府志に噪天又名告天似雀而稍大愈鳴則飛
 愈高力乏則自空投地伏於草中一方嶺嶺の夢園叢說に「叫天子 栖海濱叢草之中
 遇天中晴明飛鳴直上雲霄連綿不已翻身而下終朝若是」告天雀も叫天兒も天
 鵲も天鶴も噪天も告天も叫天子もみな鶲の異名にして我がひばり即ち雲雀
 なり元史の鴻鴈河渥兒斯の雁類にても文義は通ずれども原語の意とは異なり
 札木合のこの言につき、兀卜赤黒台(喇失揚の集史) 兀卜赤兒(紅果の
 名古囉
 顔赤きが故に號) 古囉巴阿秃兒(親征
 とせりと云ふ) 曲憐拔都(言はく「諂ひて

成吉思汗の
離れ還り

何ぞ彼の善き兄弟を讒言へる」と云へり。
 成吉思合罕夜はすぐ其處に宿りて、戰はんとて明日
 の朝日明けて王罕の陣處を見れば、無くなられて、「此
 等は我等を燒飯とけり」(明 他將我做燒飯般撤了 喇失
 揚の
 史には、我今火坑の中に在るを王罕棄) 一と云ひて、そこより成吉思
 てたり、親征録には、此輩無乃異志乎)

可罕は動ききて、額迭兒阿勒台の納(即ち)にて渡りて、(親征録)

也迭而案臺河。この河の名は、阿爾泰山の東北幹山なる唐努嶺の東麓より出づる伊第爾河また額德爾河に同じく、その河股は、額德爾

河と齊拉圖河との落合を指せるに似たり。されども色楞格河の上流の地は、この時乃蠻の塔陽罕に屬して、その勢未だ衰へざれば、蒙古の兵そこを通るに由なし。

又その地は、拜達里克河の河股の北三度ほどにあれば、拜達里克河より土拉河の方に向はんとする時道を曲げてそこを通るべき筈なし。されば名の同トきは偶

然の事にして、成吉思汗の渡)その動きたるに依り動ききて、撒阿

哩客額兒に下馬せり。(親征録)撒里川。客額兒は原にて、川も河を中に

非なり)それより成吉思合罕合撒兒二人は、乃蠻の大槩

を視て人と算へざりき。

可克薛兀撒卜喇黑は、王罕の後より襲ひて、桑昆の妻

子人民を住具ごめに虜へて率ゐて、王罕の帖列格禿阿

可克薛兀撒
卜喇黑に王
罕の襲はれ

馬撒兒(帖列格禿の口)にある一半の人民馬羣糧食を虜へて率

ゐて回りき。(帖列格禿の口は、卷四なる撒察秦出の撃へられたる處と名同じされども彼の地は、蒙古の南に在り、此の地は、客喇亦惕の

西に在れば同名の異地なるべし。すべて蒙古地方には同名の地甚だ多し。帖列格禿の口も、この二處に限らず、露西亞の地圖に、科布多城の西に帖列克特山あり、その

山の北に帖列克特山口と云ふ所あり。これも阿馬撒兒なるべし。されどもその地は、古出兀惕乃蠻の腹地に在りて、客喇亦惕の民の居るべき所に非ざれば、本文なる隘

口は、今考ふ)その戰の中に、篋兒乞惕の脫黑脫阿の忽圖赤

刺溫なる二人の子そこに居り、その民を率ゐて離れ

て、その父に合はんと、薛涼格河に沿ひ動きけり。

可克薛古撒卜喇黑(前の可克薛兀撒卜喇黑)に掠められて、王罕は、成

吉思合罕に使を遣りき。使を遣るに「乃蠻に人民住具

を妻子を虜へられたり、我子「なる汝」より汝の朶兒邊

王罕桑昆を
救へる四傑

曲魯兀惕を(四つの駿良元史兵志また木華黎の傳に撥里班曲律猶言四傑也とあり)求めて遣りぬ、我が人民住具を救ひて與へよと云ひて遣りき。成吉思合罕は、そこに孛斡兒出、木合里(卷三の模合里)、孛囉忽勒(卷三の孛囉兀勒)、赤剌溫、巴阿禿兒(卷二の赤老温親征錄)、博爾朮那顏、木華黎國王、博羅渾那顏、赤老温拔都(この四傑を軍を整へて遣りぬ。この四傑を到らする前に、忽刺安忽惕(親征錄)忽刺河山)にて桑昆は對陣となり、その馬腿を射られて捕へられんとして居る處へ、この四傑到りて救ひて、人民住具妻子都てを救ひて與へたり。そこに王罕言はく、曩に彼の善き父にかくの如く去り畢へたる部眾を救ひて與へられき。

王罕の感謝

今又その子に去り畢へたる我が部眾を四傑に來て救ひて與へられたり。恩を報さんことを皇天后土の祐護知しめせ」と云へり。

王罕成吉思汗の父子の盟約

又王罕言はく「也速該巴阿禿兒なる我が安荅は、去りたる我が部眾を一たび救ひて與へたり。帖木眞子は、又去りたる我が部眾を救ひて與へたり。この父子二人、去り畢へたる部眾を我に收めて與へたるは、誰が前に(誰が)收めて與へんと骨折りたらん。我も今老いたり。我(誰が)老いて高き處(天)に上らば、古りたり、我、古りて山崖(墓)に上らば、普き部眾を誰か管かん。我が弟どもは、德行(合元赤惕)

盟約の辭

無くあり。我が獨子、無きが如き桑昆獨あり。帖木眞子を桑昆の兄となりて、一人の子あるとなりて、休はん」と云ひて、成吉思合罕と、王罕は土兀刺の合喇屯(親征錄、土兀刺河上黑林間)に會して、父子と云ひ合ひたり。父子と云ひ合へる理由は、先に前の日也速該罕額赤格と、王罕は安荅と云ひ合ひたる緣故にて、父の如くと云ひて、父子と云ひ合ひたる理由かくあり。言(誓の辭)を言ひ合へらく「多き敵の處に奔るには、共に一つに奔らん。野の獸の處に圍獵するには、一つに共に圍獵せん」と云ひ合へり。又成吉思合罕王罕二人言ひ合へらく「我等二人を妬みて、牙ある蛇

加談の不協

に唆されれば「彼の」唆に勿入りそ。牙にて口にて言ひ合ひて信ぜん。大牙ある蛇に離閉せられれば、彼の離閉を勿取り合ひそ。口にて舌にて證し合ひて信ぜん」と云ひ、かく言を極め合ひて、親みて住み合へり。
親しき上に重ねて親しくならんと成吉思合罕は思ひて、拙赤(成吉思汗の長子、親征錄元史) 朮赤(桑昆の妹察兀兒別乞、親征錄) 抄兒伯姬(を索むるに、桑昆の子秃撒合、親征錄、汪可汗之孫) 我等の豁眞別乞(親征錄元史) 火阿眞伯姬(元史公主表、太祖女昌國大長公主、火臣別吉) を換ひ合ひて與へんとて索むれば、そこに桑昆は己を大きく思ひて言はく「我等の親屬、彼等の處に往かば、門

後に立ちて專に正面を望むなり。(明俺的(ワラノ)女子(ムスノ)到他家(イカラカレノ)イヘニ)
 呵、專一門後向北立地。(卑辱(ヒシラク)なる)を云ふ)彼等の親屬、我等の處に
 來ば、正面に坐りて門後を望むなり。(明他の(カレノ)女子(ムスノ)到俺(イカラワラフ)家(イヘニ)呵、正面向南坐(シヤウノンシ、ムカヒニシタニタシ、ヲニ)を云ふ)とて、己を大きく思ひて、我等
 を見下し言ひて、察兀兒別乞を與へず、親まざりき。その
 言にて、成吉思合罕は、心の内に王罕、你勒合桑昆(桑昆の全名なり親征録)
 亦刺合鮮昆二人に心後れけり。(心進まず協は)ざるを云ふ)

札木合等の
協議讒言

かく心後れたるを札木合覺りて、猪の年(我が建仁三年癸亥、金の泰和三年、宋の嘉泰三年西紀二〇三三)の春、札木合、阿勒壇、忽察兒、合兒答乞
 歹、額不格真、那牙勤(合兒答乞以下三名は、明譯に皆種族の名と)雪格
(せり、那牙勤氏は、篋年土敦の子合臣の裔なり)

額台、脱斡哩勒(親征脱憐の裔なり卷六に見ゆ)合赤温、別乞(成吉思汗の)

弟なる合赤温と異なり)彼等共に一つの協議をなして、起ちて往きて、

者者額兒温都兒(者者額兒の) 徹徹兒運都山、元史折運都山、明史韃靼

(高地親征録) 提綱哈納哈達山の東北なる徹徹山)の陰に別兒客額列惕(困難なる沙

別里怯沙陀)に你勒合桑昆の處に往きて、札木合讒して

言はく「帖木真なる我が安答は、乃蠻の塔陽罕(不亦魯黑罕の兄親征録)太

陽可汗(元史太陽罕)の處に傳言あり使あるなり。彼の口には

父子と云ひて居り、彼の性行は別なり。倚信して居るな

り、汝等先圖らずば、汝等に何ぞ従はん。帖木真安答の處

に出馬せば、我は横より入り合はん」と云ひき。阿勒壇、忽

察兒二人言はく「我等は、訶額命額客の子を、兄をば殺して、弟をば棄てて與へん」と云ひき。額不格真那牙勤合兒塔阿惕（前の合兒答を夕乞と阿）言はく「彼の手を手取りて、彼の足を足取りて與へん」と云ひき。脱斡哩勒言はく「思ふに、往きて帖木真をその部眾を取らん。部眾を取られれば、部眾無くなれば、何をかせん、彼等」と云ひき。合赤溫別乞言はく「你勒合桑昆なる子。汝何をか思はば、長き梢に深き底に到り合はん」と云ひて、

此等の言を言はれて、你勒合桑昆は、父に王罕に彼等の言を撒亦罕脱迭延（親征 寨罕脱脱干）もて言ひて遣り

桑昆の縁言に迷へる王罕の優柔

き。此等の言を言はれて、王罕言く「我が子を帖木真を何ぞかく思へる、汝等。今まで世話に彼より爲りて居て、今我が子をかく悪く思はば、上帝に愛まれざらん、我等。札木合は、走作の言ある「人」なりき。とやかくや（蒙 勺不兀 塔不兀）言ふなり（明 札木合的 言語 誑誕 不可信 親征 札木合 巧言寡信 人 也 不足 信）と云ひて、喜ばずして遣りき。又桑昆言ひて遣るに「口あり舌ある人言ひ居るに、何ぞ信ぜられざらん」とて繰返し言ひて遣りて、聽かれずして、己身づから往きて言く「且爾がかくある時すら、我等を何とも爲さざるなり（明 你如今 見存 他 俺）

行不當數。誠に又罕額赤格、爾を白く搶かば、黒く噎（詞どほりに譯したれども、解し得ず。蓋上の句は、病を云ひ、下の句は、死ぬるを云ふならん。明譯には、若父親老了呵、）ば、忽兒察忽思不亦嚙黑罕なる爾の父の辛苦してかく收めて居たる爾の部眾を我等に管かゝめんや。誰にも何ぞ管かゝめんや」と云へり。その言に王罕言く我が童我が子（桑昆）をいかんぞ捨てん。今まで世話に彼より爲りて、悪く思はば善からんや。上帝に愛まれざらん、我等と云ひき。その言に彼の子你勒合桑昆は憂へて、門を出でて去りき。却てその子桑昆の心を憐みて、喚びて來させて、王罕言く「上帝に蓋愛まれん、我等子をいかん

だましうち
の陰謀

蒙力克額赤
格の警告

ぞ捨てんと云へり。汝等能く但取計らへ。汝等知れ（明天莫不愛護麼。兒子行您怎生要棄捨您但去做可以勝得他的事您自知者）と云ひき。（元史忠義伯八の傳に、王罕を怯列王可汗と桑昆を先髡と書けり）それより桑昆言はく「彼等こそは、我等の察兀兒別乞を索めたりけれ。今許婚の饗（蒙語）不兀勒札兒（元史布渾察兒注に許親酒）を喫ひに來よとて、日を約して喚びて來させてそこに拏へん」と云ひ合ひて、然りとして協議を極め合ひて、「察兀兒別乞を與へん。許婚の饗を喫ひに來よ」とて遣りぬ。喚ばれて、成吉思合罕は、十人にて往くに、途にて蒙力克額赤格（親征錄）蔑里哥（た）蔑力也赤可（伯八の傳明）の家（里也赤哥）に

宿れば、そこに蒙力克額赤格言はく「察兀兒別乞を索むれば、彼等こそは、我等を見下して與へざりけれ。今いかんぞ特に許婚の饗を喫ひにとて喚び」。己を大きくなせる人、特に奈何ぞ與へんとて喚びたりし。とやかかくやの心あり。「我が」子氣を附けて往くべし。「春になりぬ。我等の馬羣瘦せたり。馬羣を養はん」とて辭みて遣らんと云ひて、「成吉思合罕は」往かず、不合台、乞喇台二人を許婚の饗を喫へと云ひて遣りて、(親征録は、)不花台乞察(の二人より喚びに遣りたる使とせり。)成吉思合罕は、蒙力克額赤格の家より回りぬ。不合台、乞喇台二人に到られたれば、「覺られたり、我等

掩襲の謀を漏せる也客扯連の輕率

明日の朝圍みて拏へん」と云ひ合へり。

かく圍みて拏へん」とて言を極め合ひたるを、阿勒壇

の弟(阿勒壇は、忽圖刺合罕の子、也客扯連は、忽圖刺の弟、忽蘭の弟、巴阿秃兒の子なれば、兄弟に非ず、弟は、從弟の義なり。)也客扯連(親征録)

也可察合蘭は、家に來て言へらく「明日の朝帖木眞を拏

へんと云ひ合へり。この言を帖木眞に言傳を致し往く

人をば、いかにか但爲さるべき」と云ひき。かく言へるに

より、その妻阿刺黑亦惕(親征録は、)亦刺罕(と書き、察合蘭の子とせり。)言はく「そ

の根無しの爾の言(明那泛濫言語、親征録)此無據之言(何

となるらん。家人も眞と爲さん」と云ひき。かく噂せる

時、その馬飼巴歹(親征録元史)把帶(木華黎の傳拔台)は、馬乳を送りに來

て、この言を聽きて回りぬ。巴歹去りて、同役の馬飼乞
 失里黑に扯噠の言へる言を言ひき。(乞失里黑は、卷一の乞失黎黑
 なり。親征錄元史は誤りて
 乞力失と書き、失力を倒にせり。哈刺哈孫の傳には、會祖啓昔禮と云ひ
 乞失里と書き、斡刺納兒氏なりとあれば抄眞斡兒帖該の長子の裔なり。
 黑言はく「我又往きて察せん」と云ひて、家に往きぬ。扯
 噠の子納隣客延は、(親征錄)察合蘭次子納憐の上に亦刺罕を察合蘭
 憐を次子とせり外に居て、箭を磋き居て言はく「只今我等は、何
 を言ひ合へる。舌を取られん。誰が口を止めん」と云ひ
 き。かく言ふと、納隣客延は、又その馬飼に乞失里黑に言
 へらく「篋兒乞歹察合安(篋兒乞歹の白馬、明譯白馬)阿蠻察合安客額兒(口白馬、明
 譯栗色馬)二匹を取りて引き來て手綱つけて「よ」夜早く出

巴歹失乞里
黒の密告

馬せん「我」と云ひき。乞失里黑去りて巴歹に言へらく「只
 今汝の話を慥めたり。眞となりたり。今我等二人、帖木
 眞に報告を送り去らん」として、言を極め合ひて、篋兒乞歹
 の白馬、口白き驢馬二匹を取りて來て手綱つけて、夕
 に便ち房の内に一匹の子羊を殺して、床もて煮て(明譯)
 將床木煮熟親征錄拆臥榻煮熟、篋兒乞歹の白馬、口白き驢
 馬二匹、目前手綱つけたるに乗りて、夜去りて、成吉思合
 罕に夜到りて、家の北(即ち後)より巴歹乞失里黑二人申し
 て、也客扯噠の言へる言、彼の子納隣客延の箭を磋き
 居て言へること、篋兒乞歹の白馬、口白き驢馬、二匹の驢

馬を取りて手綱つけよと云へる言、都てを申して上げたり。又巴歹乞失里黑二人申さく「成吉思合罕恩賜せば、疑ひ無くあり。圍みて拏へんとて言を極め合へり」と云へり。

成吉思汗實錄卷の五終り。

成吉思汗の逃げ走り

成吉思汗實錄卷の六。

合刺合勒只
惕の沙漠の
休息

かく言はれて、成吉思合罕は、巴歹、乞失里黑二人の言を信じて、夜便ち近處に居る頼るべき者に話を爲して、輕き何物をも棄てて遁れ、夜便ち動きたり。卯温都兒(惡しき高地親征録)莫運都兒山の陰に依り動くに、卯温都兒の陰にて兀浪罕の者勒篾豁阿に頼りて、(者勒篾豁阿は、即ち者勒篾なり。親征録元史)折里麥(豁阿は、媛なり。者勒篾は、何故に媛と號したるか知らず)後方に殿をなし、斥候を放ちて動き、かく動けるに依り、翌日の日の内に日傾ける頃、合刺合勒只惕額列惕に到りて憩はんと下馬せり。(この頃、合刺合勒只惕は、名高き戰場なれども、その處は確ならず。親征録)合蘭只之野(また合蘭真沙陀、元史本紀哈蘭真沙陀、畏答兒の傳哈刺真、朮赤台の)

傳なる哈刺哈真沙陀は、地（地）憩（憩）ひて居る時、阿勒赤歹（成吉思汗の弟合赤溫の子元史世系表の濟）

只吉歹（南王按）の驕馬（驕）どもを野飼（野飼）せしめたる赤吉歹、牙的兒（牙的兒）は、（親）

録 太出也迭兒（別喇津譯集史）泰出勤黑歹、牙都兒（洪鈞は「秘史奪秦字音親」征録奪吉歹音」と云へり）

路路青草に驕馬（驕）どもを野飼（野飼）しつゝ、行く時、後より卯温（卯温）

都兒の前に依り忽刺安不嚙合惕（赤き榆林、親征録）を（赤き榆林、親征録）忽刺阿卜魯（忽刺阿卜魯）

哈（誤りて二山）過（過）ぎ來る敵の塵を見て、「敵到れり」と云ひ（ハの名とせり）

て、驕馬（驕）どもを趕（趕）ひて來て、「成吉思合罕は」「敵到れり」と

言はれて、見れば卯温都兒の前に依り、紅き榆林を過（過）ぎ、

塵を上げて、王罕かく襲（襲）ひて來るなり」と云ひて（云は）、

そこより成吉思合罕は、塵を見ると、驕馬（驕）どもを拏（拏）へし

兩軍の力を較べたる王罕札木合の問答

めて、駄（駄）して上馬（上馬）せり。かく見（見）ざりせば、不意（不意）打（打）なりけ

ん。その來る時、札木合は、王罕と共に來合（來合）ひて來るな

りき。そこに王罕は、札木合に問ひき。「帖木真子の處（帖木真子の處）に、

善く戦ふ程のもの、誰かある」と問ひき。札木合言はく「そ

こに兀嚙兀惕、忙忽惕とて彼の民あり。彼のその民は

善く戦へるぞ。轉（轉）ずる度毎に陣勢（陣勢）好くあり。旋（旋）る度毎に

次序（次序）好くあり。小（小）きより環刀鎗（環刀鎗）の裏（裏）に慣れたる民。彼等

は、黒色花色（黒色花色）の纛（纛）どもあり。彼等は、用心（用心）すべき民なる

ぞ」と云ひき。その言につき王罕言はく「かくあらば、我

等は、彼等を只兒斤（親征録元史）朱力斤部（朱力斤部）の勇士どもに合（合）答（答）黒

成吉思汗に
密告する札
木合の貳心

に任せ、只兒斤の勇士どもに衝かせん。只兒斤の後援に
は、土綿土別干の阿赤黒失喩(親征録)阿赤失蘭(親征録)に衝かせん。土
別干の後援には、幹欒董合亦惕(親征録)董哀部(元史)の勇士ども
に衝かせん。董合亦惕の後援には、王罕の千の侍衛を率
ゐる豁哩失列門太石(親征録)火力失烈門大石(元史は誤りて)衝け。
千の侍衛の後援には、我等大中軍にて衝かんぞと云
ひき。又王罕言はく「札木合弟、我等の軍を汝整へよと
云ひき。その言につき、札木合別に離れて出でて、その
從者に言へらく「王罕は、この軍を我に整へよと云へり。
安荅には我敵すること能はず行きたるに、この軍を

我に整へよと云へり。王罕は、越えて我より彼方に在り
き(我よりも劣れり)酌中の伴なり(酌中の蒙語)察黒圖(解り得ず、姑く明譯に従へり)安荅に
報告を入れん。安荅、戒慎せよと云ひて、札木合は、陰に成
吉思合罕に報告を入れて言ひて遣るには「王罕は、我
に問へり。「帖木眞子の處に、善く戦ふ程のもの、誰かあ
る」と問ひたれば、我言はく「兀魯兀惕忙忽惕を頭とす
と言へり。我、我が言にて、彼等は、只兒斤を頭として、先
鋒として整へ合へり。只兒斤の後援には、土綿土別干の阿
赤黒失喩をと云ひ合へり。「土別干の後援には、幹欒董合
亦惕の勇士どもをと云ひ合へり。「董合亦惕の後援には、

王罕の千の侍衛の官人豁哩失列門太石をと云ひ合へり。彼の後援には、その王罕の大中軍の軍にて立たんと云ひ合へり。又王罕言はく「札木合弟、この軍を汝整へよ」とて、我に委ねんと言へり。これにて見れば、酌中の伴なり。軍を整へ合ふことは何ぞ能くせん。前に我は安荅に敵すること能はずして行きたるに、王罕は、我より彼方に在りき。安荃勿恐れ。戒慎せよ」と云ひて遣りき。

合刺合勒只
惕の戦

この傳言に來らるゝと、成吉思合罕言はく「兀嚕兀惕の主兒扯歹伯父（成吉思汗の同族にて、主兒斤氏の長）汝何と云ふ

らん。汝を先鋒とせん」と云へり。主兒扯歹の聲出す前に、忙忽惕の忽亦勒答兒薛禪（卷四の忽亦勒答兒薛禪は、成吉思汗より賜はれる號なり。元史畏答兒の傳に見ゆ）言はく「安荃の前に我戦はん。この後我が孤子どもを養はんことを安荃知しめせ」と云へり。（成吉思汗の忽亦勒答兒と約して安荃となれること、畏答兒の傳に見ゆ）主兒扯歹言はく「成吉思合罕の前に、我等兀嚕兀惕忙忽惕先鋒として戦はん」と云ひき。かく云ひて、主兒扯歹、忽亦勒答兒二人、兀嚕兀惕忙忽惕を率ゐ、成吉思合罕の前に整へて立ちたり。立ちたれば、敵は、只兒斤を先鋒として到りて來ぬ。來ぬれば、兀嚕兀惕忙忽惕迎へ衝きて、只兒斤を敗れり。敗りて往く時、土綿土別干の阿赤黑失喩

衝きたり。衝きて阿赤黑失論は、忽亦勒答兒を刺して落
 き。忙忽惕どもは、忽亦勒答兒の上に翻りき。主兒扯歹は、
 兀嚕兀惕にて衝きて、土綿土別干を敗れり。敗りて動か
 して往く時、斡孛董合亦惕迎へ衝きたり。主兒扯歹は、
 又董合亦惕を敗れり。敗りて往く時、豁哩失列門太石千
 の侍衛にて衝きたり。主兒扯歹、又豁哩失列門太石を退
 かして往りて往く時、王罕に相談も無く、桑昆は迎へ
 衝かんとし、赤き腮を射られて、桑昆すぐ其處に倒れき。
 桑昆を倒されて、客咧亦惕都にて桑昆の上に翻りて
 立ちたり。彼等を敗りて、落つる日丘の上に拍ちつゝあ

桑昆の負傷

る時、「主兒扯歹は」我等の軍に翻りて、忽亦勒答兒を、倒
 れたる傷あるを伴れ回りて、成吉思合罕は、我等の軍を
 收めて、「王罕より戦へる地より離れて、夕に動きて離
 れ宿れり。」

大戦の翌朝の點視

立ちて宿りて、日明けさせ點視すれば、斡闊歹、(元史本紀に太宗英

文皇帝諱は窩闊台、太祖の第三子なり) 孛囉忽勒、孛斡兒出三人無かりき。成吉思合

罕言はく「斡闊歹と共に頼るべき孛斡兒出、孛囉忽勒二人
 後に残りき。生きても死にても何ぞ離れん、彼等」と云
 へり。我等の軍は、夜その驕馬を執りて宿りて、成吉思
 合罕言はく「我等の後より襲ひて來ば、戦はん」とて、整へ

孛斡兒出の
後れ到り

て立ちたり。日明るくならせて見れば、後より一人の人
 來。到りて來れば、孛斡兒出なりき。孛斡兒出に到りて來
 らるゝと、成吉思合罕言はく「長生の上帝知れめせ」と云
 ひて、その胷を椎ちたり。孛斡兒出言はく「衝く時、馬を倒
 るべく射られて、歩み走りて行く時、その客咧亦惕ども
 が桑昆の上に翻り立てる鬪ひの際に、荷ある馬その
 荷を歪めて立ち居るを、その荷を斷ちて、その單鞍に
 乗りて出でて、我等の離れ出でたる路踏み行きて、得て
 かく來ぬ、我」と云へり。

斡闊歹孛斡
忽勒の後れ

又暫くありて、又一人の人來。到りて來る時、彼の下

到り

に脚を垂れて來。見れば、獨の人の如くあり。來畢れば、
 斡闊歹の後より孛斡忽勒疊騎(尻馬に)て、口の膈にて
 血を流して到りて來ぬ。斡闊歹は、頸脈に箭を中てら
 れて、その血凝りたるを、孛斡忽勒口にて吮ひて、塞れる
 血を膈にて流して來ぬ。成吉思合罕見て、眼より涙を
 流して、心腦み、火にて疾く焼かせ、熱を透らすると斡闊
 歹に飲物(明止渴的物)を尋ねさせて與へさせて、「敵來
 ば、戦はん」と云ひて居りき。孛斡忽勒言はく「敵の塵は、彼
 方に卯温都兒の前に依り、忽刺安孛嚕合惕(前の忽刺安不嚕合惕)の
 方に塵長く出でて、彼方に去りたり」と云へり。孛斡忽勒

のその言につき、「成吉思合罕は」來ば戰ふべきなりき。
 敵に逃げ動かれば、我等は、軍を整へて「後に」戰はんぞ」と云ひて動きたり。動くに、兀勒灰失魯格勒只惕河に派り動きて、蒼闌捏木兒格思に入りたり。(この河は、前に云へるが如く南に流る、河なれば、派るとは、南より北に還るを云ふ、然らば合刺合勒只惕にて敵に追ひ附かれて起れるこの名高き合戦はその河の下流、即ち塔塔兒四部の奥魯の在りし處、即ち今の烏珠穆沁左翼の地にて起れるなり、この古戰場を尋ねんと欲する人は、その地方にて求むべし)

合答安答勒
 都兒罕の報
 告

そこに後より合答安答勒都兒罕は、妻子より離れ來ぬ。(この人は、卷四に見えたる如く、既に成吉思汗に降りたりしが、今度の變に妻子と共に王罕に降り若しくは勝へられて、今逃げ回りたるなり)來て、合答安答勒都兒罕は、王罕の言として言はく「王罕は、その子桑昆を兀出馬(箭の名)にて赤き腮を倒るべく射られ

て、彼の上に翻りて、そこに言ひき。「惹くべからざるに

惹きたり。鬪ふべからざるに鬪ひとなり、可惜我が子の

腮に釘を釘打たしめたり。子の命を失ふまで衝き戰

はん(明譯)就我兒子性命有時、可再教衝」と云へば、その時

阿赤黑失噲言はく「罕、罕、止めよ。背處に在る子(生れざ)を

求むるに、祈り願ひをなして、阿備巴備(譯)として求め願

ひたり、我等。この生れ畢へたる子桑昆を介抱せん(明譯未

生兒子時、禱祈著要子嗣、將這既生了的兒子桑昆擡舉)

忙豁勒の多數は、札木合と共に、阿勒壇、忽察兒と共に、我

等の處に在り。帖木真と共に背きて出でたる忙豁勒は、

何處イソコに去サらん、彼等カレラ馬ウマに乗りきりにて、木キに蔽カサはるゝこ
とに爲ナりぬ、彼等カレラ明明每人ゴトニヒト止騎ノリ著著一匹馬イッヒウマ、夜裏ヨル必ハ在樹木ツキ
下宿シタヤドラン。彼等カレラを、來コずば、往ユきて馬ウマの乾糞カンソノの如イく包ツみて
持モち來コんぞ、我等ワレラは彼等カレラを」と云イへり。阿赤黑失喩アチシクニの此コの
言コトにつき王罕ウレンカン言イはく「然シカり。さあならば、子艱コナヤむらん。子コを動ウゴ
かさず介抱カイバウせよ」と云イひて、戰タケへる地トコロより回カり退シけり」と
云イへり。

合勒合河の
行軍

其處ツより成吉思合罕チンギスカンは、答蘭捏木兒格思ダランニクムルグスより合勒合河カルクカハ
(今の車臣汗部東邊の喀爾喀河)に沿シひ動ウくに、數カズ(人)を數カフへ合アへり。數カフへ合ア
へれば、二千六百となれり。一千三百は、成吉思合罕チンギスカン率ヒキぬ

忽亦勒蒼兒
の死

て「合勒合河カルクカハの西ニシの邊ヘトリに依ヨり起キちぬ。一千三百は、合勒
合河カルクカハの東ヒガシの邊ヘトリに依ヨり、兀魯兀惕ウルクウチ、忙忽惕モンクチ(親征親征)兀魯吾ウルクウ、忙兀
二部ニブ率ヒキぬて「起キちぬ。かく起キちて來クる時トキ、行糧カウリヤウ(野)を圍獵イリガリ
しつゝ、行ユく時トキ、忽亦勒蒼兒クイイルムルは、その創痊クヱえざるに、成吉思
合罕カカン止トむれども肯キかず、獸ケモノを衝ツきたれば、再發サイハツして歿シカり
ぬ。そこに成吉思合罕チンギスカンは、合勒合河カルクカハの幹兒訥兀山カンニツウサン(親征親征)幹兒
努兀ヌウの半崖ハンガイ(蒙語)客勒帖該ケルクチガイ合勒都惕カルクドチ(親征親征)遣忒哥山岡テテカサンカウに彼カレの
骸カハを放ハたら葬イめたり。

帖兒格阿篋
勒等の降附

合勒合河カルクカハの不余兒納兀兒フユニツウ(親征親征)盃而之澤サイニツに注ツぐ源イナモト(湖)
頭カサに、帖兒格阿篋勒チエリクアキヤク(卷四の迭兒格額篋勒、親征親征)等ラの翁吉喇惕ウンギラチあ

りと知りて、主兒扯歹を兀魯兀惕を領て遣りぬ。遣るに
 「翁吉喇惕の民は、前（前）の日より女甥の姿にて、息女の顔
 色にて」と云はば、和するぞ。彼等は、彼等（我）の敵と云は
 ば、戦ふぞ、我等（明）翁吉喇百姓毎、想著在前姻親呵、投降來
 者若不肯投降呵、便斫殺者」と云ひて遣りたれば、主兒
 扯歹に降り入りき。降り入られて、成吉思合罕は、彼等の
 何をも動かさざりき。

統格小河の
 駐營

そこに翁吉喇惕を降らゝむると、往きて統格豁囉罕
 の（統格小河卷一の統格黎克小河とは異なり、明親征錄董哥澤脫兒合火兒合董
 澤は、統格納兀兒にて、脫兒合火兒合は、統格豁囉罕の訛なり、蓋この小河は、湖と接
 して湖と名同トきなり、今因果答河に入る小河に唐喝河あり、巴勒主納湖に近し）

王罕の背信
 を責むる成
 吉思汗の二
 使

東に下馬して、阿兒孩合撒兒（親征錄阿里海）速格該者溫（卷
 の速客該者溫）二人に傳言せさするには「統格小河の東に下馬
 せり、我等」そのの草も好くなりき。我等の驢馬ども肥
 えたり。我が罕額赤格（罕父）に言へ」とて言はく「我が罕
 額赤格何の怒にて我を恐れさせたる、爾恐れさするな
 らば、悪き子ども悪き婦どもを安眠せさせて何ぞ
 恐れさせざる、爾坐れる床を低げさせて、上り出づる煙
 を散らして、何ぞかく恐れさせたる、爾（親征錄）與其驚畏我、
 何不使我厭煬爨而息安榻而臥使我癡子癡婦得寧
 寢乎。我が罕額赤格傍の人に刺されたらん、爾横の人

合勒只兒忽

合惕忽黑答

款迭列都

忽刺安忽惕の盟

に驚かされたらん、爾。我が罕額赤格。我等二人は、何とか
可乞兀勃迭云ひ合ひたりし。与兒合勒渾山親征卓兒完忽奴之山忽
刺阿訥兀惕（卷五の忽）孛勒答兀惕（孤山なる孛勒答
黒の複稱親征録）忽刺河班答兀
 にて、我等言ひ合はざりしか。「牙ある蛇に咬されば、彼
速都額兒の咬りに勿入りそ。牙にて口にて證し合ひて信せん」
 と云ひ合はざりしか。今我が罕額赤格は、牙にて口に
 てやは證し合ひて離れたる、爾。大牙ある蛇に離閉せら
 れば、彼の離閉に勿入りそ。口にて舌にて證し合ひて
阿馬阿兒信せん」と云ひ合はざりしか。今我が罕額赤格は、口に
 て舌にてやは證し合ひて分れたる、爾。我が罕額赤格。
昂吉赤喇

轅と輪との譬

我は、少しもあれば、多きを求めさせざりき。悪きもあ
 れば、善きを求めさせざりき。我。二の轅ある車、その第
 二の轅を折らば、その牛拽くこと能はざらん。其の如
 き爾の第二の轅にて我はあらざりしか。二の輪ある
 車、その第二の輪を折らば、起つこと能はざらん。其の如
 き爾の第二の輪にて我はあらざりしか。前の日を云
 へば、忽兒察忽思不亦嚙黑罕額赤格親征忽兒札忽思盃祿
可汗の後、四十人の子どもの兄と云ひて罕となりし
 ぞ、爾罕となり畢へて、その弟どもを台帖木兒大石不花
帖木兒（親征録、太帖木兒）二人を殺したるぞ、爾。額兒客合喇なる

叔父に王罕の逐はれたる時の也速該の救ひ

爾の弟殺されんとし、命を助かりて出でて、乃蠻の亦難察必勒格罕(卷五の亦難赤罕)の處に逃れて入りしぞ。「弟どもを殺し好きになれり」と云ひて、古兒罕(親征錄)、菊律可汗(元史)なる爾の叔父は、爾の處に出馬して來つれば、爾は百人にて命を助かり逃れて、薛涼格河に沿ひ走りて、合喇温合卜察勒(親征錄)、哈刺温之隘(ハサ)に鑽り入りたるぞ、爾。さてそこより出づるに、篋兒乞惕の脱黑脱阿に忽札兀兒兀真なる息女を顔にて與へて、合喇温合卜察勒より出でて、也速該罕なる我が父の處に來つれば、爾そこに言へらく「古兒罕叔父より我が部眾を救ひて與へよ」と云はれ

て、也速該罕なる我が父は、爾にかくとて來られて、泰赤兀惕より、忽難、巴合只(親征錄)、泰赤兀都兒吾難、巴哈只(都兒は、敦の誤りなり。泰赤兀敦は、泰赤兀惕のなり。この誤りは、修正秘史に本づきたりと見えて、喇失惕の集史も、兀都兒を人の名とせり。)二人を率ゐて、爾の部眾を救ひて與へんとて、軍を整へて往きて、忽兒班帖列速惕(卷五の帖兒速惕)、塔刺速野(親征錄)に居る古兒罕を二十三十の人を合申(親征錄元史)に、河西(蒙語合申は、漢語河西の轉なり。)逐ひて、爾の部眾を救ひて與へたるぞ。そこより來て、秃兀刺河の黒林に、我が罕額赤格は、也速該罕と安荅になり合ひて、そこに王罕なる我が父は感謝みて言はく「爾のこの恩の報いを爾の子孫の子孫に報い回さんことを皇天

也速該と安荅
荅になれる
王罕の感謝

困窮せる王
罕に對する
成吉思汗の
厚遇

后土の祐護にて知りめせ」として感謝みて居りしぞ、爾
 その後額兒格合喇(前の額兒客合喇)は、乃蠻の亦難察必勒格罕よ
 り軍を索めて、爾の處に出馬して來つれば、爾は命を
 助かり、部眾を棄てて、少き人にて走りて出でて、合喇乞
 蒼惕の古兒罕の處に垂河に撒兒蒼兀勒の地に往きた
 るぞ、爾一年を盡さず、又古兒罕より背きて出でて、委
 兀惕、唐兀惕の地に由り困窮して來るに、五匹の粘灘を
 拘へて乳を擠りて喫みて、駱駝の血を刺して喫みて、
 偏盲の黑鬘の黃馬(蒙語合里温抹脚、明旁譯黑鬘尾黃馬、文譯沙馬、高寶銓曰く西北域記曰一狐毛短而難者曰沙狐二鬘音天、黃白色沙馬蓋)にて來ぬるぞ、爾罕額赤格の爾を、かく困窮

木魯徹薛兀
勒の戰

して來ぬと知りて、先に也速該罕なる我が父と安蒼
 と云ひ合ひたる故と思ひて、塔孩、速客該二人を爾の迎
 へに使に遣りて、又我自ら客魯噠河の不兒吉岸より
 迎へ往きて、古薛兀兒の湖(親征錄)曲笑兒澤に遇ひ合ひた
 るぞ、我等爾を困窮して來ぬと云ひ、科斂を斂めて爾
 に與へて、先に我が父と安蒼と云ひ合ひたる緣故に
 て、土兀刺河の黒林にて我等二人の父子と云ひ合へる
 緣故は、かくあらずや。その冬爾を團營の内に入れて
 養ひたるぞ。冬冬籠りして夏過して、その秋篋兒乞惕の
 民の脫黑脫阿別乞の處に出馬して、合廸黑里黑你嚕温

(合地黑里黑 哈丁黑山 史元 哈丁里) の木魯徹薛兀勒(親征錄 元史) 莫那

察山(親征錄 又木奴叉力之野) に戦ひて、脱黑脱阿別乞を巴兒忽

真脱古木に逐ひて、篋兒乞惕の民を虜へて、彼等のあま

たの馬羣宮室彼等の田禾都てを取りて、罕額赤格に與

へたるぞ、我爾の飢ゑたるを日の晝に至らゝめざり

しぞ。爾の瘦せたるを月の半に至らゝめざりしぞ、我

爾(親征錄) 使汝饑不過日午、羸不過月望。又我等は、古出古兒

兩汗の乃蠻 征伐

台(卷五の古出古場 乃蠻の分部の名) 不亦嚕黑罕を兀魯黑塔黒の莎豁黑兀孫(莎

黒の水卷五の) より阿勒台山を越えゝめ追ひて、兀嚕古河に

沿ひ往きて、乞赤勒巴石納兀兒(乞赤勒巴石の湖卷五 乞失勒巴失納兀兒) に窮めて

取りしぞ、我等。そこより回りて來る時、乃蠻の闊克薛兀

撒卜喇黑(親征錄) 曲薛吾撒八刺、拜荅喇黑別勒赤兒(拜荅喇黑 河股) に

軍を整へて對陣したる時、夕暮になられて、明日の朝

戦はんとて、整へ合ひて宿れば、我が罕額赤格爾は、そ

の陣處に火を燒かせて、夜合喇薛兀勒河に沂りて動き

たるぞ、爾。明日の朝見れば、その陣處に無く爲られ、爾

に動かれて、「此等は、我等を燒飯とけり」と云ひて、我

も動きて、額迭兒阿勒台の泖にて渡りて來て、撒阿里客

額兒に下馬したるぞ。そこに爾を可克薛兀撒卜喇黑は

襲ひて、桑昆の妻子人民住具都てを取り、罕額赤格の爾

可克薛兀撒 卜喇黑の追 襲

の帖列格禿阿馬撒兒(帖列格禿の口)にある一半の人民馬羣糧食を虜へて去れば、篋兒乞惕(親征錄蔑力乞滅里乞元史蔑里乞部)の脫黑脫阿(親征錄)の脱脫の子、忽都(卷五の忽圖)、赤刺溫(親征錄火都赤刺溫)二人、その人民住具と共に爾の處にあるが、その戰の中に、その父に合はんと、巴兒忽眞に入らんと、爾の處より背きて動きざ。そこに我が罕額赤格、爾は、乃蠻の可克薛兀撒卜喇黑に人民住具を虜へられたり、我。我が子、朶兒邊曲魯兀惕(四)を與へて來よ」と云ひて來つれば、爾の如くは思はず、そこに我は、孛斡兒出、木合里、孛囉忽勒、赤刺溫、巴阿禿兒、この四傑を軍を整へて遣りたれば、我がこの四傑

四傑の救ひ

の先に、忽刺安忽惕にて桑昆は對陣となり、その馬腿を射られて捕へられんとして居る處へ、我がこの四傑到りて、桑昆を救ひ、妻子人民を住具ごめに都てを救ひて與へたれば、そこに我が罕額赤格は、感謝みて言はく「子なる帖木眞に去り畢へたる人民住具を四傑をおこせて救ひて與へられたり」と云ひて居りき、爾。今我が罕額赤格は、いかんぞ我を怒りに怒れる、爾。怒る理由(理由を)爲に使をおこせよ。おこするには、忽巴哩忽哩亦都兒堅二人をおこせよ。二人をおこせずば、第二(第二の人)をおこせよ」と云ひて遣りたれば、(親征錄に「可遣案敦阿速、渾八力二人來報、否則遣一人」とあり、この

講和の望み

王罕の悔痛

二人は、卷五の阿勒屯阿條黑忽勒巴哩に於て、喇失惕も親征録に同じ、忽勒巴哩は忽巴哩忽哩と名似たるに由り、修正秘史の誤れるなるべし。

この言につき、王罕言はく「嗚呼息苦き」かな(蒙語) 莎亦魯黑。我が子より、離る、道理よりやは離れたる。分る、關係よりやは分れたる。我」と云ひ、心艱みて言はく「今子を見て悪く思はば、かくの如く血を出されん(殺)」と誓ひて、小指を弾き、箭削る小刀にて刺して血を流して、小さき樺桶に盛りて、「我が子に與へよ」と云ひて遣りぬ。(樺桶は、樺の皮の小桶なり。柳邊紀略に曰く「樺木、徧山皆是、類白楊、春夏間剝其皮、入汗泥中、謂之糟、糟數日出而曝之、地白而成花形者、爲貴、金史所謂醬瓣也。」黑龍江外記に曰く「山谷多樺木、土人以爲箭筈、爲鞍版、爲刀柄、皮以貼弓、爲車蓋、爲穹廡、爲札哈。」原注小船也。縫之如栲栳、大擔水、小盛米、麪謂之樺皮斗、俄羅斯亦有之、極小、雕鏤精巧、宜儲檳榔、鼻煙、號老光斗。)

札木合に對する嘲り

阿勒壇忽察兒の背信を責むる痛切の言

又成吉思合罕は、「札木合安答に言へ」とて言はく「我が罕額赤格より見ゆる能はずして離れしめたり、汝。(明補在前時、毎日、二人幼くして始めて安答となれる頃の事なるべし。)我等の先に起きたるは、罕額赤格の青鍾を以て馬乳を飲みたりき。我に先に起きて飲まる、を妬みたるぞ、汝。今罕額赤格の青鍾を飲み乾し、幾ばくを費すか、汝等」と云ひて遣りぬ。又成吉思合罕は、「阿勒壇忽察兒(親征録元史)案彈、火察兒」二人に言へ「とて言はく「汝等二人、我を棄てて、面をや撒てんと云へる、汝等、行をや撒てんと云へる、汝等。(面をすつるは、體を辱むるを云ひ、行をすつるは、事業を壞るを云ふ。)親征録 汝二人欲殺我、將棄之乎、瘞之乎。(洪鈞の重譯には、汝二人惡我、將)

仍爾我地上乎抑埋（我地下乎とあり）忽察兒（親征）捏羣太石（元史）の子と云ひて我等より汝罕（親征）と爲れ」と云へば爲らざりしぞ汝阿勒壇（親征）を汝を「忽秃刺罕（親征）こそは「國を」管き行きけれ。その父管（親征）居たるに依り汝罕（親征）と爲れ」と云へば亦爲らざりしぞ汝上（長房より數へての意なり明譯）より（在上輩親征録にも上輩とあり）「巴兒壇巴阿秃兒の子（壇は合黒の誤りにして即ち合不勒罕の長子幹勤巴兒合黒なりこれは原本の初より誤りて修正秘史もその誤りを承けたりと見えて喇失惕の集史もこれに同じ親征録はその誤りを覺りけん）八兒合拔都（改め元史は伯祖八刺哈（書）と書けり八兒合も八刺哈も即ち幹勤巴兒合黒なりまた子は孫に作るべし但し孫をも子と云へるかも知れず元史は八刺哈之裔と書）と云ひて撒察台出（親征録）薛徹大丑（元史）二人を「汝等合惕（罕の）と爲れ」と云ひて能はざりしぞ我汝等（複稱）を「合惕

蒙古の臣道

となれ」と云ひて能はずして汝等（親征）に「汝罕（親征）となれ」と云はれて管（親征）行ききたるぞ我汝等（親征）合惕（親征）となりたるならば多（多）敵（敵）に先鋒（先鋒）に走らせられれば上帝（上帝）に祐護（祐護）せられれば敵（敵）の人（人）を虜（虜）ふる時（時）腮美（腮美）き少女（少女）妃婦人（妃婦人）を臀節（臀節）好き（好き）騙（騙）馬（馬）を取り來て與（與）ふるなりしぞ我野（野）の獸（獸）に先驅（先驅）せさせられれば崖（崖）の獸（獸）はその前脚（前脚）を一竝（一竝）に寄せて與（與）ふるなりしぞ我懸崖（懸崖）の獸（獸）はその後脚（後脚）を一竝（一竝）に寄せて與（與）ふるなりしぞ我曠野（曠野）の獸（獸）はその腹（腹）を一竝（一竝）に寄せて與（與）ふるなりしぞ我（親征録に假汝等爲君吾當前鋒俘獲輻重亦歸汝也とあり汝等合惕となり以下の）今我（今）が罕額赤格（罕額赤格）に善（善）きに伴（伴）と

金帝の察兀
惕忽哩

蒙古の興れ
る三河の源

なりて與へよ。厭き易くと云はれんぞ、汝等。察兀惕忽哩
 (卷四の札)の扶植のみなりきと勿云はれそ。(明)您如今卻
 離了我、在王罕處、您好生做伴著、休要有始無終、教人
 議論你每、全倚仗著帖木眞、無帖木眞呵、便不中用了。思汗
 の自ら察兀惕忽哩と稱するを見れば、この時までには、蒙古の合罕
 は、小部落の酋長に過ぎずして、金の官爵を榮譽としたりたるなり) 三河(幹難客魯
 の源は、誰にも勿下營せしめそ)と云ひて遣りぬ。(親征
 三河之源、我祖實興、毋令他人居之、汝若事吾父汪可汗、勿使疑汝爲察兀忽魯之
 族而累汝、即汪可汗交人易厥、於我尙爾、況汝輩乎、縱然今夏、豈能到來冬矣)とあ
 り、察兀忽魯の事は、秘史と意違ひ、又二人の厭き易きことを王罕の事に移せり、元
 史には三河、祖宗肇基之地、毋爲他人所有、汝善事汪罕、汪罕性無常遇、我尙如此、
 況汝輩乎、我今去矣、我今去矣)と云ひて、文は麗しくなりたれども、意味は全く親
 征録に因り、「我今去らん」の二語は、進むことか、退くことか、面白き様にて面白か
 らず、蛇
 足なり)

脱幹哩勒を
弟と云へる
緣故

又成吉思合罕は「脱幹哩勒(親征) 脱憐(親征)なる弟に言へ」と
 て言く「弟と云へる緣故は、屯必乃、察刺孩、領忽(親征) 察刺合
 令忽、統必乃)二人の幹黑荅(親征) 塔塔)奴に依り起りて來
 ぞ。幹黑荅奴の子速別該(親征) 雪也哥)奴ありき。速別該
 奴の子闊闊出乞兒撒安(親征) 闊闊出黑兒思安)ありき。闊闊
 出乞兒撒安の子也該晃塔合兒ありき。(親征) 折該晃脱合兒
 蓋卷三の者該晃荅魯兒に同じ。然らば脱幹哩勒
 は、速格該者温と兄弟にして、速客度氏なり)也該晃塔合兒の子脱幹
 哩勒、汝誰が部眾を「王罕に」與へんとて諂ひ行ける、汝。我
 が部眾は、阿勒壇、忽察兒二人、誰にも管かゝめぬぞ。汝
 を弟と云へる緣故は、我が高祖父(屯必)の戸限の奴、我

が曾祖父額部出克（合不勒罕）の門額兀額の近習卷出の奴ヤソコ「なり」に由る」と我が云ひて遣ること、かくあり。」

桑昆の不孝を誡むる安答の忠言

又成吉思合罕は「桑昆安答親征（鮮昆案答）に言へ」とて言はく「衣服ありて生れたる子にて我はあり」ぞ。裸にて生れたる子にて汝はあり」ぞ。我等の罕額赤格は、我等二人を齊等に養ひたりき。閒に入らるゝより、桑昆安答は、我を嫉みて逐ひたるぞ。汝。今我等の罕額赤格の心を艱まさず、夕に朝に入りて出でて慰めて行け。舊の心譯明（你舊嫉妒的心）を放たず、罕額赤格を命ある内に罕とならんとて、我等の罕額赤格の心を艱ま

七人の使者二人づゝ

桑昆の哀頑

して勿苦まゝめそ」と云ひて、「桑昆安答、我に使をおこせ來るには、必勒格別乞、脫朶延親征（必力哥別吉、脫端）なる二人の従士をおこせよ」と云ひて遣りぬ。「我に使來るには、罕額赤格は、二人の使をおこせよ。桑昆安答も、二人の使をおこせよ。札木合安答も、二人の使をおこせよ。阿勒壇も、二人の使をおこせよ。忽察兒も、二人の使をおこせよ。阿赤黑失喲も、二人の使をおこせよ。合赤溫卷五（赤溫）も、二人の使をおこせよ」とて、阿兒孩合撒兒、速格該者溫二人をもてかく言はれて、桑昆言はく「幾たびも罕額この言どもをかく言はれて、桑昆言はく「幾たびも罕額

赤格と云ふなりき。殺し好きの翁とやは云はざりし。我を幾たびも安荅と云ひたりき。脱黑脱阿師巫、撒兒塔黑(撒兒塔兀勒の國)の羊の尾に續きて行けりとやは云はざりし。此にて言どもの計略は、覺られたり。戦はんの首なる言なり。必勒格別乞、脱朵延二人、戦ふ轟を立てよ。驢馬どもを肥やせよ。疑ひ無くあるぞ」と云へり。(脱黑脱阿云云は、當時か風をなしたるなり。委しき事は、今知るべからず。明譯) 我行也幾會說是安荅來。只說脱黑脱阿師翁續著回回羊尾子行有。元の世にても已に意味を解りかねたりと見えて、親征録には、彼何嘗實意待我爲案荅特以玩物視我耳と譯せり。別喇津は刺失惕を譯し、彼は我を安荅と呼べども、又常に我を罵ると約めて、自注に下に脱忽布惕の一語あり、篋兒乞惕の脱克塔の事ならん。語意解し難しと断れり) かくて王罕より阿兒孩合撒兒回る時、速

速格該の居残り

巴勒主納湖の駐營

格該者温の妻子は、そこに脱幹哩勒の處に居りき。去る心になりかねて、速格該者温は、阿兒孩より後れき。阿兒孩來て、この言どもを成吉思合罕に言へり。かくて成吉思合罕は、去りて巴勒主納納兀兒に下馬せり。(巴勒主納の湖は、斡難河の北にて、露西亞の咱拜喀勒州なる赤塔の南にあ夏に宜しく、蒙古人は、今もその地を指して、成吉思汗の難を避けたる處なりと云ひ傳ふと云ふ。親征録は河の名とし、喇失惕は地の名として、そこに小河どもありと云ひ、他の西史は、錄の如く河の名とせり。秃喇河を昔は巴勒主納河と云へるにや、又は別に湖に注ぐ巴勒主納河あり、かも知れず。親征録、元史、雪不台の傳班朱泥河。太祖本紀、札八兒火者、速不台、鎮海、哈散納、阿朮魯、紹古兒の傳には、班朱泥河とあり、下に委しく引けり。元史にて湖の名とくたるは、朮赤台の傳に班眞海子とあるのみなり) そこに下馬する時、搠幹思察罕(名)豁魯刺思(姓)、正にそこに遇ひ合へり。それらの豁魯刺思(親征録)火魯

巴勒主納の水飲み即ち濁水の誓

飲渾水即ち巴勒主惕の諸説
太祖本紀の飲渾水

刺部)は、鬪はずに降り來ぬ。汪古惕(親征 元史汪古部)の
 阿刺忽失的吉惕忽哩(親征 元史阿刺兀思別吉忽里)の處
 より阿三撒兒塔黑台(阿三と云ふ 撒兒塔黑人)白き駱駝ある千の羯羊(千一匹まどれる)を趕ひて、額兒古捏河に沿ひ、貂鼠青鼠を買ひ
 て取り來る時「成吉思合罕に」巴勒主納に水飲みに入る
 處に遇へり。(この水飲みは、名高き巴勒主納の濁水の誓なり、秘史の文は、簡略なるが故に、參考の爲に、紀傳に見えたる敘事を下に引かん)
 太祖帝既遣使於汪罕、遂進兵、虜弘吉刺別部溺兒斤以行、
 至班朱泥河、河水方渾。帝飲之以誓眾。有亦乞烈部人孛
 徒者、爲火魯刺部所敗、因遇帝、與之同盟。哈撒兒別居哈
 刺渾山、妻子爲汪罕所虜、挾幼子脫虎走、糧絕、探鳥卵、

爲食、來會于河上。時汪罕形勢盛強、帝微弱、勝敗未可
 知、眾頗危懼。凡與飲河水者、謂之飲渾水、言其曾同艱
 難也。(この文は、全く親征錄に據りて、只「河水方渾」と「時汪罕」以下の三十七字とを
 加へたるなり。溺兒斤は、即ち親征錄前文の帖木哥阿蠻にて、不余兒湖の
 頭にありと秘史に記せる帖兒格阿篋勒なり。帖兒格阿篋勒の降りたるは、成吉思汗
 の合勒合河に沿ひ動ける時にあるを、親征錄は重ねてこゝに溺兒斤を虜ふと記
 せるは、誤りなり。元史は、又前の降附の事をば「怯里亦部人、遂棄汪罕來降」と改め
 て、溺兒斤を虜へたることは、親征錄のまゝに書けり。されども統格小河より巴勒主
 納湖に遷るに、何ぞ不余兒湖の「札八兒火」者(札八兒火者 傳なる馬)の傳なる馬
 邊を過ぐるに、何ぞ不余兒湖の「札八兒火」者(札八兒火者 傳なる馬)の傳なる馬
 邊を過ぐるに、何ぞ不余兒湖の「札八兒火」者(札八兒火者 傳なる馬)の傳なる馬

汪罕潛兵來。倉卒不爲備、眾軍大潰。太祖遽引去、從行
 者僅十九人、札八兒與焉。至班朱尼河、餼糧俱盡、荒遠無
 所得食。會一野馬北來、諸王哈札兒射之、殪。遂剗革爲
 釜、出火于石、汲河水、煮而啖之。太祖舉手仰天、而誓曰、

「使我克定大業、當與諸人同甘苦、苟渝此言、有如河水。」

將士莫不感泣。これは、飲渾水の如くも聞ゆれども、水を飲めるに非ずして、馬を啖へるなり。濁水の誓に非ずして、馬肉の誓なり。然る

にこの傳は、誤りだらけにて、信難し。札八兒は、西域の族長なるに、西域征伐の十餘年前に蒙古に仕へて克烈征伐の役に加はれるは、已に怪むべく、又居庸關の戰

は、者別等紫荆關より入りて居庸の南口を破れるを、札八兒の前導にて居庸の關道より軍を進めたりと云たるなど、疑はききこと多ければ、馬肉の誓もいかいある

べ。尤赤台ユウシタイの傳 從征怯列亦、自罕哈啓行、歷班真海子、開關萬里、

每遇戰陳、必爲先鋒。罕哈は、合勒合河なり。班真海子は、巴勒主納湖なり。合勒合河より巴勒主納湖に至れるを、開關萬里と云へ

るは、形容に過ぎたり。この傳にも誤り多し。合勒合河只惕の戰を叙べて、怯列亦哈刺哈真沙陀等、帥眾來侵」と書き出し、沙漠の名を人の名と云たるは、最も笑ふべ

し。單騎陷陳、射殺鮮昆」と書きたれども、單騎には非ず、兀魯兀惕を率ゐたり。射殺には非ず、腮を傷けたるのみなり。客喇亦惕の亡人なる札哈堅普を、乃蠻の主と云たる

は、太祖本紀の札阿紺字なり。速不台ソクブタイの傳 太祖在班朱尼河時、哈班嘗驅羣羊、以進、遇盜被執、忽魯渾與速不台繼至、以槍刺之。人馬

尤赤台の傳
なる班真海子

速不台の傳
なる班朱尼河

皆倒、餘黨逸去。遂免父難、羊得達於行在所。この事の後に、

赤は亦の誤りにて、即ち闊亦田の戰あれば、この事は、成吉思汗の巴勒主納に到りし時には非ずして、客魯噠の上流なる不兒吉岸、又は古喇勒古に居たる時の事なるべし。速不台の傳の復出なる雪

不台の傳にも、この事を載せて、太祖初建興都于班朱泥河、今龍居河也。と云へり。秦定帝紀に、癸巳、即皇帝位於龍居河とありて、その大赦の詔に、九月初四日、於成吉思皇帝の大斡耳朶裏大位次裏坐了也」と云

へれば、秦定即位の處は、客魯噠河の闊迭額洲の大斡兒朶なるべく、龍居河は、金史完顏奴申の傳なる龍駒河、長春の西遊記の陸局河に於て、即客魯噠河なり。然らば

班朱尼も班朱泥も客魯噠の誤りにて、興都とは客魯噠鎮海、怯烈台氏、噠河の上流なる成吉思汗駐營の地を稱したるなり。の傳 鎮海、怯烈台氏

初以軍伍長、從太祖、同飲班朱尼河水。の傳 哈散納、怯烈亦氏。太祖時、從征王罕有功、命同飲班朱尼河之水、且

曰、與我共飲此水者、世爲我用。の傳 阿朶魯、蒙古氏。太祖時、命同飲班朱尼河之水、扈駕親征有功。阿朶魯の孫なる

懷都の傳にも

祖時、命同飲班朱尼河之水、扈駕親征有功。阿朶魯の孫なる懷都の傳にも

鎮海の傳

哈散納の傳

阿朶魯の傳

紹古兒の傳
速哥の傳な
る父懷都

土土哈の傳
なる水飲み
の舊事

阿塔海の傳
なる祖塔海
拔都兒

麥里の傳な
る祖雪里堅

懷都、幹魯納台氏。祖父阿朮魯、與太祖同飲黑河水、屢從

征討。とあり、幹魯納台は、秘史の幹羅納兒氏なり。阿朮魯の傳に蒙古氏とあるは、

紹古兒、麥里吉台氏。事太祖、命同飲班朱尼河

之水、扈從親征。麥里吉台は、篋一にあらす、卷の百廿四なる

怯烈氏、世傳李唐外族。父懷都、事太祖、嘗從飲班朮居河

水。居は、尼の土土哈世祖巡幸北邊、召見慰諭之曰、「昔太祖

與其臣同患難者、飲班朮河之水、以記功。今日之事、何

愧昔人、卿其勉之。」班朮の下尼の阿塔海阿塔海、遜都思人。祖塔

海拔都兒、驍勇善戰、嘗從太祖、同飲黑河水、以功爲千

戶。阿塔海は、日本に寇して逃げ還りたる大將なり。遜都思は、秘史の塔孩巴阿朮兒なり。麥里、徹

那顏

耶律阿海禿
花兄弟の傳

兀臺氏。祖雪里堅、那顏從太祖、與王罕戰、同飲班眞河水、

以功授千戶。朮赤台の傳なる班眞海子は、巴勒主納納耶律禿花、

契丹人。世居桓州。太祖時、率眾來歸。大軍入金境、爲嚮

導、獲所牧馬甚眾。後侍太祖、同飲班朮河水。濁水の誓は、金

り前にあれば、後と云へるは誤れ耶律阿海、遼之故族也。云云。歲

壬戌、王可汗叛盟、謀襲太祖。太祖與宗親大臣同休戚、

者、飲辨屯河水爲盟。阿海兄弟皆預焉。辨屯も、巴勒主喇失惕額

釣の重譯汪罕軍勢仍盛。帝見不敵、亟引退。退後、部眾渙

散。帝乃避往巴勒渚納。是地有數小河、而是時水涸流濁、

僅可飲渾水。帝慷慨酌水、與從者誓。當日從者無多、稱

喇失惕額丁
の巴兒主惕

之曰巴兒渚特、延賞及後世焉。巴勒主納の語尾を變へて復稱の詞とし、巴勒主納の水飲みに預れる人人の稱とせるなり、元史に飲渾水と書きたるも、巴勒主納を義譯したるなり、喇失惕のこの叙事は、秘史よりも親征録よりも委し、されどもその文に據れば、合刺合勒只惕の戦の後、統格湖に往く前に、直ちに巴勒主納に往きて、濁水を飲み、それより合勒合河に沿ひ下る代りに、沂り、帖兒格、阿篋勒を降し、統格湖に駐まりて、使を遣り、二たび巴勒主納に往きたりとなして、地勢時情皆合はず、巴勒主納の水飲みは、使を遣りたる後にあることは、親征録も秘史に同トければ、喇失惕の之に違へるは、修正秘史の誤りを承けたるには非ず、喇失惕の偶誤れるなり、又札八兒火者、耶律阿海の傳に依れば、王罕の掩襲を避けて逃げ出でたる時、直ちに巴勒主納に至りて誓へるに似たり、これは時情には善く合へれども、曖昧なる單文孤證のことなれば、秘史親征録の明文を打ち消すほどの力は無かるべし。

合撒兒の逃げ還り

成吉思合罕は、その巴勒主納に水飲み居る時、合撒兒は、妻子を、也古（元史世系表、潘川王也古、太宗紀、野苦、憲宗紀、野古また、也松、耶虎、世祖紀也古、耶律留哥の傳也古、王珣の傳也忽）、也松格（元史世系表、移相哥大王、憲宗紀、亦孫哥、世祖紀也先哥）、禿忽（親征録、元史太祖紀、脱、虎、世系表、脱忽大王）なる三人の子を王罕の處に捨てて、僅に身にて、從者を伴れて出で

成吉思汗のたばかり

て、兄をとて成吉思合罕を尋ね、合喇温只敦（親征録、哈刺渾、只敦山、元史哈刺渾山）の嶺どもに縁りて、得る能はず、困窮して牛皮と筋とを喫ひて行きて、巴勒主納に成吉思合罕に合へり。合撒克に來らるゝと喜びて、成吉思合罕は、王罕に使を遣らんと謀りて、沼咧亦惕の合里兀答兒（親征録、哈柳答兒）兀浪罕の察忽兒罕（卷三の察兀兒罕、親征録）抄兒寒（二人もて言ひて遣るに）罕額赤格に合撒兒の言とて言へ」とて言はく、「兄を望みて、彼の影を失へり。踏みて彼の路を得かねたり。叫びて、聲を聽かれざりき。星を望みて、土の枕にて臥したり、我。我が妻子は、罕額赤格の處にあり。信賴

を望み得ば(明譯)若差一箇可倚仗的人來呵、罕額赤格の處に住かん、我ワレと言へ」と云ひて遣りぬ。又言はく「我等は、汝等に續き動きて、客魯噠河の阿兒合勒苟吉に約合はん。汝等そこに来よ」と約合ひて、便ち合里兀荅兒察忽兒罕二人を遣ると、主兒扯歹、阿兒孩二人を先驅として、巴勒主納納兀兒より成吉思合罕續き起ち合ひて、出で出馬したるまゝに客魯噠河の阿兒合勒苟吉に到りぬ。

王罕金帳の筵會

合里兀荅兒、察忽兒罕二人、王罕の處に到りて、合撒兒の言として、此處より言ひて遣りたる言を言ひき。王罕

は、金の天幕を起して、不意にて筵會して居りき。(金の天幕は、蒙古語阿勒壇帖兒篋。宋の彭大雅の黑鞬事略に「其金帳、柱以金製、故名」と云ひ、疏證にその「即是草地中大氈帳。上下用氈爲衣、中間用柳編爲窗眼透明、用千餘條索拽住。闕與柱、皆以金裹。故名。中可容數百人」とあり。これは、元の太宗の時の製を述べた)合里兀荅兒、察忽兒罕二人の言につき、王罕言はく「然あらば、合撒兒來よ」と云ひて、「頼るべき亦秃兒堅(前の亦都兒堅、親征録亦秃兒干)を遣らん」として遣り合ひき(共に遣りき)。かくて來ると、約會の地に阿兒合勒苟吉に到れば、形影大なるを見て、亦秃兒堅なる使回り走りき。合里兀荅兒の馬は、速くありき。

亦秃兒堅の捕はれ

合里兀荅兒追驅けて、捕ふる心遂げずして、彼の前後を横ざり行く時、察忽兒罕の馬は遅くありき。後より箭の到る先にて(箭の達する距離にて)、亦秃兒堅の金の鞍ある黒き驪馬の臀の根を坐るべく(尻をつくほどに)射たりき。そこに亦秃兒堅を合里兀荅兒察忽兒罕二人捕へて、成吉思合罕の處に率て來ぬ。成吉思合罕は、亦秃兒堅に話し合はず、「合撒兒の處に率て往け。合撒兒知れ」と云へり。率て往きたれば、合撒兒は、亦秃兒堅に話し合はず、すぐ其處に斬りて棄てたり。

者額兒山の戦

合里兀荅兒、察忽兒罕二人、成吉思合罕に申さく「王罕は、

不意にてあり(明不隄防)。金の天幕を起して筵會してあり。速く支度して、夜夜夜通(夜夜夜通)行きて襲ひ圍まんと云へり。この言を善くして、主兒扯歹阿兒孩二人を先驅せしめて、夜夜夜通(夜夜夜通)到りて、者折額兒温都兒(卷五の者額兒温都兒、親征錄徹徹兒運都山、元史折折運都山)の折兒合卜赤孩(折兒のはさま)の口に居るを圍みたり。三夜三日禦がれ、圍みて立ちたれば、第三の日窮迫して彼等降れり。王罕桑昆二人は、夜いかに出でたるをも知られざりき。この禦ぎ合ひたる者に、只兒斤の合荅黒巴阿秃兒(前の合荅黒)ありき。合荅黒巴阿秃兒降りて來て言はく「三夜三日禦ぎ合へるに、正主の君を見ると、拏へて

合荅黒勇士の働

忽亦勒答兒の遺族の賞賜

いかんぞ殺さしめんと云ひ、廢つる能はずして「命を助かり逃去れ」と云ひ、挑み鬪ひ禦ぎ合ひたり。我今死なめられれば、死なん。成吉思合罕に恩賜せられれば、力を與へんと云へり。成吉思合罕は、合答黒巴阿秃兒の言を善くとして、勅あるに「正主の君を廢つる能はずして、命を助かり逃去れ」と云ひ、禦ぎ合ひたる丈夫にて彼はあらずや、伴となるべき人なり」と云ひて、恩賜して死なめず、忽亦勒答兒の命(戰死)の故に、合答黒巴阿秃兒を百人の只兒斤を忽亦勒答兒の妻子に「與へ、彼等に」力を與へよ。男の子生れば、忽亦勒答兒の子孫の子孫に至るまで

畏答兒の傳の原據

隨ひて力を與へよ。女の子生れば、その父母は己が意にて勿嫁がせそ。忽亦勒答兒の妻子の前後に仕へよ」と恩賜し勅ありき。忽亦勒答兒薛禪の口を先開きたるが故に、成吉思合罕は恩賜して勅あるに「忽亦勒答兒の子孫の子孫に至るまで、忽亦勒答兒の功の故に、遺族の賞賜を取り居よ」と勅ありき。(姚燧の牧庵文集に、平章忙兀公博羅驪の故に、下に引かん。博羅驪は、忽亦勒答兒の曾孫にして、世祖の朝の平章政事なり。畏答而與兄畏翼俱事太祖。時太時盛強、畏翼謀往歸之。畏答而苦止曰、帝何負汝而爲是。竟去、追之不復。雪泣而歸、請獨宣力。帝貳之曰、汝兄與眾皆往、獨留何爲。乃折矢誓曰、所不終事帝、有如此矢。帝感其誠、易名屑慶、約爲按答。帝與王罕陳於曷刺真、彼眾我寡、救兀魯一軍先發、其將朮徹帶玩鞭馬、不應屑慶請曰、戰猶整也。匪斧不入、我先爲擊。願帝訣曰、臣萬一不還、三黃頭兒將軫聖慮者。辰入疾戰、大敗其軍。哺猶逐北、敕使止之。乃旋師、免胄爲殿、腦中流矢。帝親爲傅藥、寢與同帳、踰月而卒。帝曰、曷只里吉爲敵將、實禦屑慶、其以只里吉民百戶屬屑慶子、世世歲賜勿絕。其

族散亡者收完之、即封北方萬家、元史畏答兒の傳は、全くこの文を探り、只畏答而を改めて畏答兒とし、屑塵を薛禪とし、按答を按達とし、曷刺真を哈刺真とし、朮徹帯を朮徹台とし、只里吉を只里吉實と誤れり。又太時、秦赤兀惕、兀魯は兀魯兀惕曷刺真は合刺合勒只惕、朮徹帯は主兒扯歹なり。只里吉は、即ち只兒斤なるを、誤りて敵將の名とせり。又この戦は、日暮に始まりて、雲時に、決したるを、辰より、晡に至るとせるは、非なり。合答黑勇士を忙兀惕氏に賜はれる事につきて、李文田は、以、其忠誠衛上、使、忽亦勒答兒家、得其死力也、と云へり。然るに、元史は、この碑文に據り、只里吉の抗敵したるが爲に、賜はれりと書けるに、由り、高寶詮は、之を駁して、刺忽亦勒答兒下馬者、初非只兒斤、且太祖方嘉合答黑、可以倣伴、則其所以與忽亦勒答兒家者、李說爲長。元史云、淺矣、と云へるは、甚だ當れり。

成吉思汗實錄卷の六終り。

塔孩勇士の恩賞

成吉思汗實錄卷の七。

札合敢不の二女

かく客咧亦惕の民を屈服せしめて、各分けて虜へさせたり。速勒都思の塔孩巴阿秃兒(卷三の塔孩)の功の故に、一百の只兒斤を與へたり。又成吉思合罕勅あり、王罕の弟札合敢不に二女の息女ありしその姉女亦巴合別乞を(卷八の末に二たび見ゆ)成吉思合罕自ら取り、妹女莎兒合黑塔泥別乞を拖雷に與へたり。(元史本紀に、憲宗桓肅皇帝、諱は、蒙哥、睿宗拖雷の長子なり。母を莊獻太后、怯烈氏、諱は、唆魯禾帖尼と曰ふ。后妃表に、睿宗の唆魯和帖尼妃子、怯烈氏、追諡、莊聖皇后、また、顯懿、莊聖皇后とあり。拖雷は、本傳に、睿宗、景襄皇帝、諱は、拖雷、太祖の第四子、太宗の母弟なりとあり。)その縁に依りて、札合敢不を彼に従ふ呢近の民も圓全第二の轅と爲れと云ひて、恩賜して虜へさせざり

巴歹乞失里
黒の恩賞

き。

又成吉思合罕勅あるには「巴歹、乞失里黒二人の功の故に、王罕の金の天幕、鋪陳したる金の酒局の器皿を、取扱ふ人ごめに「與へん。」汪豁只惕客喇亦惕は、(汪豁只惕姓の客喇亦惕人汪豁只惕は、汪豁眞の複稱なり。卷四の温眞は、親征録の嫩眞、別喇津の弘豁攸惕に) 彼等の番士と爲れ。箭筒を帶ばしめて、喝蓋せしめて (明飲酒時、又許他喝蓋) 子孫の子孫に至るまで自在に快樂せしめん。多き敵に奔らば財を得ば、得たるまゝに取野の獸を殺さば、殺したるまゝに取れと勅ありき。(喝蓋は、蓋を乾かすと云ふ意にて、筵會の時、阿不惕に樂を奏して酒を進むるを云ふ。蒙語は、阿不惕にて、明譯には進酒とも譯)

喝蓋の禮

天子凡宴饗、一人執酒觴、立於右階、一人執柏板、立於左階。執板者、抑揚其聲、贊曰、幹脫。執觴者、如其聲、和之曰、打弼。則執板者、節一板。從而王侯卿相、合坐者、坐、合立者、立。於是眾樂皆作、然後進酒。詣上前、上飲畢、授觴、眾樂皆止、別奏曲、以飲陪位之官、謂之喝蓋。蓋沿襲亡金舊禮、至今不廢。諸王大臣、非有賜命、不敢用焉。幹脫打弼、彼中方言。未暇考求其義。幹脫は、即ち幹脫克にして、打弼は「宜云へば、觴を執れる者」(宜し)と應ふるなり。酒を飲む時にこの禮を用ふることは、諸王大臣にても、合罕の特許を得たる者に非ざれば能はざりたり。 又成吉思合罕勅あるには「巴歹、乞失里黒二人の、「我が」命の間に功を致せる故に、長生の上帝に祐護せられて、

客例亦惕の民の分配

客例亦惕の民を屈服せしめて、高き位に到りたるぞ。この後我が子孫の子孫に、位に居て、かくの如く功を致せることを継ぎ継ぎに省みさせんと勅ありき。客例亦惕の民を虜へて、誰にも缺けざるまでに撒し合へり。
 萬の秃別延（卷五の土綿秃別干元）を撒し合ひて、引受けつゝ、取り合へり。多き董合亦惕を整ふる日に到らず虜へさせたるぞ。血（赤連秃）ある物（生きたる人）を剥ぎ要ふる只兒斤の勇士どもを開きて分けて、共に到る能はざらしめたり。客例亦惕の民をかく滅して、その冬は阿卜只阿闊迭格兒（親征録）阿不札闊忒哥兒之山（冬籠）に冬籠したり。

王罕の殺され

王罕、桑昆二人、身を以て反りて出でて去ると、的的克撒合勒の捏坤兀孫（捏坤の水、親征録）捏羣烏孫河（親征録）にて王罕喉乾きて入りたるに、乃蠻の斥候豁哩速別赤（親征録）火里速八赤の處に入りき。豁哩速別赤は、王罕を拏へけり。我は、王罕なり」と云へども、認めず信ぜずして、そこに殺しけり。桑昆は、的的克撒合勒の捏坤兀孫に入らず、外に去りて徹勒に入りて水求めたるに、（徹勒は唐書の勅勒鐵勒の音に似たり。鐵勒の故地又は故地の一部に古名の残れるなるべし。卷十二に徹勒の地に井を穿てる事あり、廣き地方の名に似たり。）野馬ども（蒙語）忽刺惕（黃に薄青）窟に刺されて立てるを、桑昆馬より下りて覷ひけり。桑昆の從者闊闊出と云ふ馬丁に妻ありて、桑昆と三

闊闊出馬丁に桑昆の棄てられ

馬丁の妻の忠言

人にてありき。馬を闊闊出馬丁に執らゝめけり。闊闊出馬丁、その驕馬を牽くと、回り走りき。その妻言く「金あるを被る時、滋味あるを食ふ時、「桑昆は」我が闊闊出と云ふなりき。己が君を桑昆をいかんぞかく捨てて投りて去りたる、爾」と云ひて、その妻立ちて残りけり。闊闊出言はく「桑昆を男にせんとしてなるぞ、汝」と云ひき。その言につき、その妻言はく「婦の人は狗の面ありと云はるゝぞ、我。彼の金の盃をも與へ、水も汲みて飲ませよ」と云ひき。そこより闊闊出馬丁は、彼の金の盃を取るとて、後に向き棄てて走りき。かくて來ると、成吉思

君を棄てたる馬丁の誅せられ

王罕の頭を乃蠻にての祭

合罕の處に闊闊出馬丁來て、「桑昆をかく徹勒に棄てて來ぬ、我」とて、そこに言ひ合へる言を都てをみな申して上ぐれば、成吉思合罕勅ありて、その妻を恩賞して、その闊闊出馬丁をば「正主の君をかく棄てて來ぬ。かゝる人今誰に伴とならば倚信すべけん」と云ひて斬りて棄てたり。

乃蠻の塔陽罕（親征 太陽可汗、元史太祖紀 太陽罕、蒙古源流 達延汗）の母古兒別

速（親征 錄）菊兒八速（塔陽罕の妻）言はく「王罕は、前の老たる大なる

罕なりき。彼の頭を持ち來よ。其ならば祭らん、我等」と云ひて、豁哩速別赤の處に使を遣りて、彼の頭を斷ち

塔陽罕を譏
る可克薛兀
撒卜喇黑の
慨言

て持ち來させ、認めて白き毛氈の上に置きて、媳婦
どもに媳婦の禮を行はしめて、喝盞せしめて、樂器を
弾かしめて、盞を執りて祭りき。その頭かく祭らる、時
笑ひけり。笑へりとして、塔陽罕は、碎くべく踐みけり。そこ
に可克薛兀撒卜喇黑言ひき。「死にたる王者（蒙語罕古温る人）
の頭を爾等又斷ちて持ち來て、次には爾等又碎きて、
何の善き事か。我等の狗の吠ゆる聲悪く爲れり。亦難
察必勒格罕言ひき。「妻少く、夫なる我老いたり。この塔
陽を祈禱に依りて生れさせけり。嗚呼、懦く生れたる我
が子は、久後あまたの下等なる悪くき部眾を撫でて持

塔陽罕の大
言

ち能はんや」と云ひき。今狗の聲は、「禍の」近づける吠え
を吠えたり。我等の合敦古兒別速の法度は鋭く爲れり。我
が罕懦き塔陽は弱くあり。爾は、鷹を使ふこと圍獵する
こと二つより外に心も技も無し」と云はれて、そこに
塔陽罕言はく「この東に些の忙豁勒あり」と云はれたり。
彼の民は、老いたる大なる前の王罕を箭筒にて威して
反らしめて死なしめたり。今その罕と爲らんとして
あり、彼等。天の上には日月二つ耀く光となれとて、日
月二つは有るぞ。地の上に二つの合惕（罕の複稱）にはいかで
か爲られん。我等往きて彼の忙豁勒を持ち來ん」と云ひ

天無二日地無二王

き。(明)天上止有一箇日月。地上如何有兩箇主人。如今咱去將那達達取了。日月二つを一箇と譯したるは違へり。修正秘史は、この言を汪古惕部に言ひ遣りたる言に入れたりと見え、

親征録には、使者の言として「日月在天了然見之。世豈有二王哉」と譯し、一つとも二つとも云はず、耀く光をば了然にてごまかせり。訶渥兒斯の重譯には「天に日二つ、二つの鞘に刀二つ、一つの目に眼二つ、一つの天下に二人の王あるべけんや」とあり。これは、修正秘史の原文に拘らずして増飾したるなり。洪鈞の重譯は、刀眼の譬を省き、「我知天上惟一日一月。地下亦不容有兩王」と譯して、親征録の文に近寄らせたり。元史の「天無二日、民豈有二王邪」と書けるは、秘史の文とは違へども、

黒き忙豁勒

支那の古語にも合ひ、文意)その時その母古兒別速言はく「いか
にせんぞ、彼等を。忙豁勒の民は、氣息惡しく、衣服黑暗な

りき。(宋の黃震の古今紀要逸編に「韃靼之近漢者、曰熟韃靼、其遠於漢者、曰生
帝」と云ひ、孟拱の蒙韃備錄に「韃靼始起之地、處契丹之西北、其種有三、曰黒曰白
曰生、今成吉思皇帝及將相大臣、皆黒韃靼也」と云ひ、又彭大雅の黒韃事略に「黒韃
之國、號大蒙古」と云へり。黒韃靼は、漢人の蒙古を呼べる名にして、之を黒と云へ
るは、蓋衣服の黒きに由れり。然れども、黒韃事略に其服右衽而方領、舊以氈毳革、

新以紵絲金線、色用紅紫紺綠、紋以日月龍鳳、無貴賤等差」と云へば、黒)外に

遠ざかりて居れ。彼等の清き媳婦ども息女どもを若く
は取り來させて、彼等の手足を洗はせて、牛羊の乳を
若くは擠らしめん、只」と云ひき。その時塔陽罕言はく「か
くあらば、何か有らん。彼等忙豁勒の處に往きて、彼等
の箭筒を必ず取り持ち來ん」と云ひき。

老將の諫を
聽かざる塔
陽罕の狂愚

この言につき、可克薛兀撒卜喇黑言はく「嗚呼、大なる
言を言ふかな、爾等嗚呼、懦き罕、宜うからんや。秘密にせ
よ(明)你不可說大話。這話你再休說」と云ひき。可克薛兀
撒卜喇黑に勧められ(諫め)てあるに、脱兒必塔失と云ふ使

箭背を誤らざる汪古惕

を汪古惕の阿刺忽石的吉惕忽哩に言ひて遣るには「この東に些の忙豁勒ありと云はれたり。汝は右の手となれ。我はこゝより力を并せて彼の少の忙豁勒の箭筒を取らん」と云ひて遣りき。その言に、阿刺忽石的吉惕忽哩答へて言はく「右の手となること能はず、我と云ひて遣りて、阿刺忽石的吉惕忽哩は、月忽難と云ふ使もて成吉思合罕に言ひて遣るには「乃蠻の塔陽罕は、爾の箭筒を取りに来ん。我に右の手となれと云ひて來ぬ。我は爲らず。今我爾に警告して遣りぬ。」(明譯補足)若不隄防、來て箭筒を取られん、爾」と云ひて遣りき。(汪古惕の阿刺忽石的吉惕忽)

駱駝が原の圍獵

哩は、親征錄に王孤部主阿刺忽思的乞火力、元史本紀に白達達部主阿刺忽思、本傳に阿刺兀思、別吉忽里、汪古部人とあり。白達達は、汪古惕の漢名にして、即ち古今紀要蒙韃備錄の白韃韃なり。親征錄に曰く「乃蠻太陽可汗、遣使月忽難、謀於王孤部主阿刺忽思的乞火力、曰「近聞東方有稱王者。日月在天、了然見之。世豈有二王哉。君能益吾右翼、奪其孤矢、阿刺忽思、即遣使朶兒必塔失、以是謀先告於上、後舉族來歸。我之與王孤部親好者、由此也。乃蠻の使、朶兒必塔失、を汪古惕の使と誤り、汪古惕の使、月忽難を乃蠻の使と誤れり。又元文類に、閼復の駙馬高唐王閼里吉思の碑あり。閼里吉思は、阿刺忽石の曾孫なり。その碑に曰く「金壘山爲界、以限南北。阿刺兀思、惕吉忽里一軍扼其衝。太祖聖武皇帝起朔方、併吞諸部、有國西北、曰帶陽罕者、遣使卓忽難來謂曰「天無二日、民無二王。汝能爲吾右臂、朔方不難定也。」阿刺兀思料、太祖終成大事、決意歸之。即遣麾下將禿里必答思、齎酒六桶、送卓忽難於太祖、告以帶陽之謀。時朔方未有酒醴。太祖祭而後飲、舉爵者三。使還、酬以馬二千、蹄羊二千、角」この碑文も、使の名を誤れること、親征錄に同し。元史阿刺兀思の傳は、この碑文に本づきて、使の名をば略けり。正にその時、成吉思合罕は、帖篋延客額兒(駱駝が原、親征錄また帖木拔川)に圍獵して、禿勒勤扯兀惕を圍みて居る時、阿刺忽石的吉惕忽哩の遣りたる月忽難なる使、この報を致し來ぬ。こ

乃蠻征伐の
評議

の報につぎ、圍獵の上にて便ち「いかにかせん、我等」と云ひ合へれば、多くの人言はく「我等の驢馬ども瘦せた。今何かせん、我等」と云ひ合ひき。その時幹惕赤斤那顔(即帖木格 幹惕赤斤)言はく「驢馬ども瘦せたりとて、いかんぞ辭まれん。我が驢馬どもは肥えたり。かゝる言を聞きて、いかんぞ坐られん」と云へり。又別勒古台那顔言はく「生きて居る間に、家人箭筒を取られば、生きて何の詮か有らん。生れたる丈夫、死なば又箭筒弓と骸と一つに臥さば善からずや。乃蠻の民は、國大く民多しとて、大なる言を言ひたり。我等、この彼等の大なる言に倚り、出馬

幹兒訥兀山の
半崖の駐
營

して往きて、彼等の箭筒を取らば、難きことあらんや。往かば、彼等のあまたの馬羣は、止まりて残らざらんや。彼等の宮室は、空になりて残らざらんや。彼等のあまたの部眾は、高き處に遁れて上らざらんや。彼等にこのかゝる大なる言を言はしめて、いかんぞ坐られん。出馬せん、便ち」と云へり。

別勒古台那顔の此の言を善しとて、成吉思合罕は、圍獵を罷めて、阿卜只合闊帖格兒(前の阿卜只 阿闊迭格兒)より動きて、合勒合河の幹兒訥兀山の半崖に下馬して、(半崖は、客勒帖該 蒙語)客勒帖該合荅卷六の客勒帖該合勒都惕と義同ト。即ち忽亦勒荅兒を葬りたる處なり。親征録には哈勒合河建武垓山、元史には建武該山とありて、幹兒訥兀なる山の

千戸百戸牌
子頭六扯兒
寶の任命

名を脱し、半の蒙語なる客勒帖該を山の名とせり。喇失惕も親征録に同ト。この句に依りて考ふれば、成吉思汗の圍獵したる帖篋延客額兒も、冬籠したる阿ト只阿闊迭格兒も、溯りて王罕の不意打を食ひし者額兒温都兒も、みな今の車臣汗部の東南境にありて、王罕は、合刺合勒只惕の戰の後に、未だ土兀刺の黒林の舊庭に還らざりしなり。洪鈞はこの哈勒合河は、必ず東方の哈勒哈河に非ずと云へれども、秘史の下文に、客魯噠河に浜り撒阿哩客額兒に到るとあれば、東方の地なること、何の疑ひか) 數(人)を數へ合ひて、千をそこに千とし(千人を以てあらん) 數(數)を數へ合ひて、千をそこに千とし(千人を以て)

て、千戸の官人、百戸の官人、十戸の官人をそこに任した

り。(元史兵志に「國初典兵之官、視兵數多寡、爲爵秩崇卑、長萬夫者爲萬戸、千夫者爲千戸、百夫者爲百戸」又「十人爲一牌、設牌頭」とあり。この牌頭は、後文にはみな牌子頭と云へり。然れば千戸の官人は、漢語にては只千戸と云ひ、百戸の官人は、百戸と云ひ、十戸の官人は、牌子頭と云へるなり。蒙韃備録にも「韃人生長鞍馬間、起兵數十萬、略無文書、自元帥) 扯兒賓(侍從)をもそこに任

たり。朶歹 扯兒必(卷三の多) 朶豁勒忽 扯兒必(卷三の多豁) 斡格列 扯兒必(卷三の斡歌連徹兒) 脫命 扯兒必(親征録脱脱樂閣兒必、脱の字一つ必又斡歌來徹兒必) 多し元史木華黎の傳、撥忽閣、哈八

番士の新設

親軍千夫の
長なる阿兒
孩合撒兒

兒秃の傳千戸脱倫、石抹也先の傳脱忽閣里必、石抹孛迭兒の傳奪忽閣里必、忠義傳に伯八の父脱倫閣里必、晃合丹氏、明里也赤哥の子別咧津は、蒙格里克の子脱命扯兒必と云へり。明里も蒙格里克も、晃豁壇の蒙力克額赤格なり) 不察喇 扯兒必(前には) 雪亦客秃 扯兒必(卷三の雪亦) この六人の扯兒賓をそこに任したり。千を千とし、百を百とし、十を十とし(千人百人十人の組合を作り) 畢へて、八十の宿衛(蒙語) 客卜帖兀勒) 七十の侍衛(蒙語) 土兒合兀惕(明譯) をそこに番士(番直の士蒙語) 客失克田(明譯護衛) 怯薛歹(元史兵志) に選びて入らむるに、千戸百戸の官人どもの子ども弟どもを次に、白身の人の子ども弟どもを次に、技能あり身材好き者どもを選びて入らめたり。そこに阿兒孩合撒兒に恩賜して、「勇士どもを選びて千夫とせよ。戰ふ

侍衛の長なる幹歌列扯兒必

侍衛宿衛等の職掌

日には我が前に立ちて戦へ。多くの日は我が侍衛の番士となれ」と勅ありき。「七十の侍衛には、幹歌列扯兒必長となりて居れ。忽都思合勒潺(卷三なる忽都思にて忽必來の弟)と議り合ひて居れ」と云へり。

又成吉思合罕勅あるには「箭筒士(蒙語豁兒赤、明譯帶弓箭)

的(元史兵志)火兒赤(塔察兒の傳火兒赤者)侍衛番士(侍衛の番士)厨官(蒙語巴兀兒赤、元史兵志親烹飪以奉)門者(蒙語額兀顛赤)馬官(蒙語阿黑塔赤)

ども、晝は番直(蒙語客失克)に入りて、日落つる前に宿衛

に擲して、「馬官は驢馬の處に、出でて宿れ(明譯帶弓箭)

的人并散班護衛厨子把門人等、教日裏入班來、至日落

時、將管的的事物交付與宿衛的、出去宿者。若管馬的、守

著馬(ウマ)宿衛は、夜室の周圍に臥すものには臥させて、門

に立つものには輪直して立たしめよ。箭筒士侍衛は、そ

の翌朝我等湯を飲まば、宿衛に告げて、箭筒士侍衛厨官

門者ども、只只その職分を行へ。その居處に居よ。「宿衛

は「三夜三日番直する日を盡して、只又法に依り三夜

宿り(下宿)合ひて、替り合ひて、夜宿衛して居れ。周圍に臥

して宿れ」と勅ありき。かく千を千とく畢へて、扯兒必

を任して、八十の宿衛七十の侍衛を番士に入らしめて、

阿兒孩合撒兒に勇士どもを選び(選ば)て、合勒合河の幹

乃蠻征伐の
首途

兩軍斥候の
衝突

兒訥兀山の半崖より乃蠻の民の處に出馬したるに、
 鼠の年（我が土御門天皇元久元年甲子、宋の嘉泰四年、金の）夏の首の
 月の第十六の日の紅き光に、霧を祭りて出馬したる
 に、客魯噠河に浜り、者別忽必來（親征録元史）虎必來哲別二人を
 先鋒として行き、撒阿哩客額兒に到れば、康合兒罕山の
 頂に乃蠻の斥候そこにありき。（康合兒罕山は、露西亞の地圖に見ゆる布爾林達班嶺なるべし。康合
兒罕と云ふ名は、今の地圖には見えざれども、その嶺の東なる古の撒阿哩客額兒
の地を衰古魯台草地と云ひ、その嶺の西南を渾呼魯台戈壁と云ひ、衰古魯も渾呼魯
も康合兒に近ければ、古はその嶺又はそ）我等の斥候と逐ひ合ひて、
 我等の斥候より、一匹の青馬に悪き鞍あるを、乃蠻の
 斥候に取られき。乃蠻の斥候は、その馬を取りて語り

朶歹扯兒必
の疑兵の謀

合へらく「忙豁勒の驕馬瘦せたり」と云ひ合ひけり。我等
 の「軍」は、撒阿哩客額兒に到りて、そこに止まりて「いかに
 せん」と云ひ合へば、そこに朶歹扯兒必は、成吉思合罕に
 建言すらく「我等は但少くあり。少きが上に疲れて來
 ぬ。かくも止まりて驕馬どもを飽かせつゝ、この撒阿哩
 客額兒に廣がり下營して、命あるだけの人毎に（この間に男の）譯
すべき語あり文法上）五處に火を燒きて、火にて嚇さん。乃蠻
 の民は多くと云はれたり。彼等の罕は家より出でざり
 弱き「人」と云はれたり。火にて惑はする間に、我等の驕
 馬どもも飽けらんとぞ。驕馬どもを飽かすめ、乃蠻の斥候

を逐ひて追逼りて、彼等の中軍に合はしめ、その亂の裏に戦はば成らんか」と建言したれば、この言を善として、成吉思合罕勅あるには「かく便ち火を焼かしめよ」とて、軍士どもに號令を傳へたり。かくて撒阿哩客額兒に廣がり下營して、命あるだけの人「毎に」五處に火を焼かしめたり。夜乃蠻の斥候は、康合兒罕山の頂より夜あまたの火を見て、「忙豁勒を少」と云はざりしか。星より多き火あり」と云ひ、塔陽罕に悪き鞍ある青馬の小馬を送りて遣りて、「忙豁勒の軍士ども撒阿哩客額兒に満つるまで下營したり。晝の内に増たらんか。星

敵の銳を避くる塔陽罕の協議

より多き火あり」と云ひて遣りき。

斥候のこの報に到られて、塔陽罕は、康孩山(親征 杭海山)

合池兒(元史太祖紀 沆海山、世祖紀十四 康里脫脫の傳 杭海、今の杭愛山) 兀孫(合池兒の水親征錄) 哈只兒兀

孫河(親征 孫河) にありしが、この報を致さるゝと、古出魯克罕(親征 孫河)

出律可汗(又曲出律可汗、元史 屈出律罕、抄思の傳 曲書律) なる子の處に告げて遣るには「忙

豁勒の驕馬ども瘦せたり。星より多き火あり」と云へり。

忙豁勒多く有り。今我等合ひ畢へば、離ること難くな

らんか(明 今若與他連兵、後必難解)。合ひ畢へば、その

黒き目を瞬き(喜兒慶思) 做さず、その腮を刺さるとも、黒き血出

づとも、避くること無き剛なる忙豁勒に合はば、成らん

狗の鬪ひ

や。忙豁勒の驕馬ども瘦せたりと云はれたり。我等は、部
 眾に阿勒台山(親征錄案臺 元史按臺)を越えさせ退かせ動ききて、軍を
 整へて、彼等を誘ひて行ききて、阿勒台山の下に到るまで
 狗の鬪ひを鬪ひて行ききて、我等の驕馬どもは肥えて
 あり、腹を引起させ、忙豁勒の驕馬どもを疲れさせ、彼等
 の面の上に水注げん、我等」と云ひて遣りき。(阿勒台の東南
 向ひて烏蘭郭馬山となり、奇勒稽思泊の北を繞り、又東南に向ひ、白勒克那克科克依山の南麓に今烏里雅蘇
 山となり、又東へて杭愛山の陽に接す。白勒克那克科克依山の南麓に今烏里雅蘇
 台城あり、塔陽罕は、蓋その邊に駐牧せり、こゝに阿勒台)その言につき、古
 出魯克罕言はく「彼等にかく婦人塔陽心怖ちて、この言
 を言へり。忙豁勒の多きは、いづこよりか來けん。忙豁勒

父を罵る古
出魯克罕

君を罵る豁
哩速別赤

の大半は、札木合とこゝに我等の處にあり。孕婦(坤都額殿)の更衣
 の地(合札兒 合略)に出でたること無き、車下の犢の草喫ふ處(古略)に到れ
 ること無き婦人塔陽は、心怖ちて、この言を言ひてお
 こせたるに非ずや」とて、使に依り、父を痛むるまで疚
 むるまで、言ひて遣りき。この言につき、塔陽罕は、己を
 婦人とせらるべく言はれて、塔陽罕言はく「力あり勇あ
 る古出魯克、到り合ひ殺し合ふ日に、必ずこの勇を勿失
 ひそ。到りあひ合ひ畢へば、離るゝこと必ず難くあるぞ」と
 云へり。その言につき、塔陽罕の下を管れる大官人豁
 哩速別赤(親征錄元史 火力速八赤)言はく「亦難察必勒格罕なる爾の父